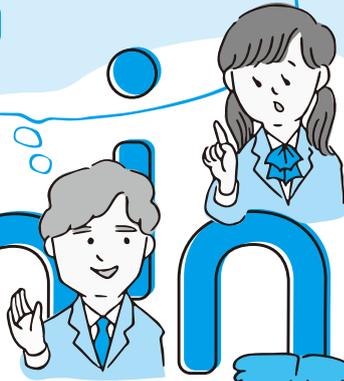


市民社会をつくる
ボランティア
フォーラム

TOKYO 2023

報告書

Think



Act



Smile.

2023年

2/10_金11_土12_日

3日間にわたり、
様々な社会問題に焦点をあてた
19の分科会を開催します。

飯田橋セントラルプラザ及びオンラインほかで開催

主催 東京ボランティア・市民活動センター

企画運営 市民社会をつくるボランティアフォーラムTOKYO 2023実行委員会

後援 東京都、特定非営利活動法人日本NPOセンター

特別協賛 株式会社三菱UFJ銀行

協賛 NECネットエスアイ株式会社、NPO法人モバイル・コミュニケーション・ファンド
株式会社熊谷組、公益財団法人SOMPO環境財団、公益財団法人SOMPO福祉財団
公益財団法人日本社会福祉弘済会、公益財団法人日本テレビ小鳩文化事業団
社会福祉法人テレビ朝日福祉文化事業団、西武信用金庫飯田橋支店
東京都生活協同組合連合会、トヨタ自動車株式会社

協力 株式会社ガイア、社会福祉法人清水基金、生活協同組合パルシステム東京、
中央労働金庫、モンデリーズ・ジャパン株式会社

(五十音順)

参加費

1分科会:1,000円

高校生以下または18歳未満の方は無料

詳細・申込方法

ホームページをご覧ください。

詳細・申し込みはコチラ!! >>>

フォーラムホームページ

<https://tvac.or.jp/vf/>

ボランティアフォーラム 検索



お問い合わせ

東京ボランティア・市民活動センター

TEL: 03-3235-1171

FAX: 03-3235-0050

Facebook: @voluntaryforumtokyo 「市民社会をつくるボランティアフォーラムTOKYO」 / Twitter: @voluntaryforum / Instagram: @voluntaryforum

はじめに

東京ボランティア・市民活動センターでは、「ボランティアまつり」「ぼらんていあ・めっせ」、2004年からは「ボランタリーフォーラム」と名前を変えながらも、開設当初より、ボランティアや市民活動に関わる方や関心のある方が集い、つながる場をつくってきました。

今年度の「市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO2023」（以下、「Vフォーラム」）では、「Think・Act・Smile☺」をテーマに、19の分科会と、交流会・クロージング、2つの企画展を実施し、参加者、登壇者、ボランティア、実行委員、スタッフを合わせのべ698名の方にご参加いただきました。

本報告書には、それぞれの分科会の開催目的や様子、分科会を通して伝えたかった実行委員の想いや参加者の声、実施しての成果やこれからの課題が掲載されています。また、職種や年齢も異なる多様な実行委員会メンバーが、議論を重ねながら、Vフォーラムの形を作り上げてきた記録も同時に収められています。

より多くの方が本報告書を目にすることによって、誰もが笑顔で過ごすことができるような社会を築いていくための、一人ひとりにとってのきっかけや新たな一歩となることを願っています。

東京ボランティア・市民活動センター

もくじ

はじめに

第1章 企画編

ボランティアフォーラムができるまで・・・・・・・・・・・・・・・・	2
-----------------------------------	---

第2章 実施編

市民社会をつくるボランティアフォーラム TOKYO2023 開催概要・・・・・・・・	6
--	---

各プログラム実施報告

01 見えにくい貧困問題を考えてみよう～フードバンクの活動から～・・・・・・・・	8
02 「誰もが学ぶことができるまちをつくる」 ～市民の参加ですすめる障害者の生涯学習～・・・・・・・・	10
03 持続的な活動のために～資金づくりから考える～・・・・・・・・	12
04 みんなで考える多文化共生～多文化は日本に何をもたらすのか～・・・・・・・・	14
05 江戸川区ひきこもり実態調査から、行政とNPOの連携について考える・・・・・・・・	16
06 生活の中に笑いを～江戸時代の明るく笑って生きるにヒント～・・・・・・・・	18
07 想いをつなげて、地域で作ろう！みんなの居場所【フィールドワーク】・・・・・・・・	20
08 やさしい日本語って、なんですか？～みんながつながることばを探そう～・・・・・・・・	22
09 誰かの「困った！」から始まるボラセンと地域の未来・・・・・・・・	24
10 私のボランティア活動は「何のため？」「なぜ続けているの？」・・・・・・・・	26
11 ボランティアのインセンティブって何だ？！ 矛盾する二つの言葉「有償・無償ボランティア」を考える・・・・・・・・	28
12 ボランティアの中心・飯田橋でモヤモヤを叫ぶ ～施設の中はどうなってますか？ボランティアさんどうしてしてますか？～・・・・・・・・	30
13 「社会の現状から働く場のダイバーシティを考えよう！」 ～ガチャガチャ de ダイバーシティ体験会～・・・・・・・・	32
14 会場&オンライン交流会「スマイル☺」・・・・・・・・	34

15	防災意識を高めよう!!～ほっとする食の確保と地域の支え合い～	36
16	記録と記憶から振り返る関東大震災 ～市民による救援活動の源流を訪ねる～【フィールドワーク】	38
17	東京の市民発電所を知ろう!～たまでん発電所見学会～【フィールドワーク】	40
18	もっと気軽にボランティア活動をしたい! ～ボランティア活動の裾野を広げるためには～	42
19	コロナに負けない!学生たちの取り組みから学ぶ、活動運営のコツ	44
20	若者にとって生きやすい社会って??	46
21	クロージング「考える 動いて笑顔 わたしから」	48
22	ふれあい満点市場～NPO・NGOの作品展示販売～	50
23	情報誌『ネットワーク』表紙原画展	51
	(参考)市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO 開催状況	52
	実行委員名簿	53
	協賛・協力	54
	ボランティアでご協力いただいたみなさま	55
	ボランタリーフォーラムにご協力いただいたみなさま	56

<第 1 章> 企 画 編

ボランティアフォーラムができるまで

市民社会をつくるボランティアフォーラム TOKYO とは？

市民社会をつくるボランティアフォーラム TOKYO（以下、「Vフォーラム」）は、私たちの暮らしに関わるさまざまな「社会課題」に焦点をあて、それを共有し、私たち市民にできることを考えていくためのイベントとして2004年から始まり、今年で19回目となりました。

初回から一貫して、分野、地域、セクターを横断したボランティア・市民活動にかかわるメンバーで実行委員会を組織し、ボランティア・市民活動をする中で直面する課題や想いをもとに企画・運営しています。分科会を通して、想いや考えを共有し、参加者や実行委員のそれぞれの一步につながることを目的としています。

実行委員会について

Vフォーラムの今年度の方向性を検討するために、まず準備会を開催しました。準備会は、長年Vフォーラムに関わっている少数のメンバーで構成され、これまでのVフォーラムを振り返るとともに、今年度の方向性や運営、実行委員会のあり方などについて話し合いました。

実行委員会は、準備会での話し合いをふまえ、さまざまな分野・地域から集まったメンバーで立ち上げ、取り組んでみたい社会問題についてのグループワーク、テーマ決め、分科会に関する話し合いを行いました。実行委員会は、振り返りの回を含め、10回開催しました。

第1回の実行委員会では、実行委員がボランティア・市民活動の中で感じている、今気になること・共有したい社会課題を、キーワードとして出しました。ハイブリッド開催となるため、会場では付箋を貼り、オンラインではチャットに意見出しを行いました。その後、出し合ったキーワードをグループディスカッションでより深め、それをもとに各自で分科会企画案を作成しました。

その後、4つのカテゴリー「孤立・孤独」「地域」「多文化」「平和・人権」に分かれ、各分科会の企画から当日の運営まで、何度も話し合いを重ね、助け合いながらVフォーラムをつくりました。企画者の考えだけでなく、他の実行委員のさまざまな意見を加えていくことで、よりブラッシュアップされた分科会ができあがっていきます。こうした分科会の企画を進めると同時に、Vフォーラム全体に関わる運営については、「部会」で話し合いを進めました。

今年度の部会は、Facebook や Twitter・Instagram など SNS の活用や PR 動画を作成する「広報部会」、クロージングの企画を行う「全体会部会」、アンケートの活用やファンドレイジングに関する検討を行う「マーケティング部会」、参加者同士の交流の場や実行委員間の交流会を企画する「交流会部会」の4つの部会を設けました。



第1回実行委員会の様子。今年度は、会場とオンラインのハイブリッド開催になりました。

アンケートでは、回答者98名のうち、58名の方が「初めて参加した」と回答しており、Vフォーラムが皆さんの活動の一步を進める後押しになればと思います。アンケートでは、「とても楽しく参加出来たこと、比較的中年～若年の方たちの参加が多くて、頼もしく思えました。」「コロナ禍ですとオンラインだったボランティアフォーラムでしたが、今回久しぶりの会場参加で感無量で楽しかったです。」「様々な問題の解決のためには、日頃からの顔の見える関係や信頼関係の構築が大事であるという事が改めて認識できた。」「たくさんの方の意見を聞いたり、情報交換ができ、今後の活動に活かしたいと思いました。」などのご意見が寄せられました。

分科会企画案の公募

これまでのVフォーラムにない視点や分野、課題を取り入れ、より幅広い社会的テーマで分科会を企画することをねらいとして、分科会企画案を公募しています。分科会企画案の公募が採用された場合も、案をそのまま実施するのではなく、公募の提案者も実行委員となり、他の分科会企画と同様、実行委員会で内容を検討し、多様な考え・意見を取り入れた上で、内容を磨き上げていきます。また、他の分科会についても共に内容を検討し、Vフォーラム全体の運営にも関わります。

募集概要と実施結果

<p>【内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアフォーラムのプログラムの一つとして分科会企画案に基づいた社会課題の発信機会の提供 ・2023年2月10日（金）～12日（日）の内1コマ ・予算は、30,000円まで など <p>【条件】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・月1回程度、平日夜間に開催される実行委員会への参加が可能であること ・企画案をもとに、実行委員会の中で一緒に議論・検討し、企画を作り上げ、実施に向けて協力していただけること ・フォーラム当日の3日間に出席し、他の分科会準備、運営も含め協力いただけること など <p>【応募方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・所定の企画書（A4サイズ2枚）に記載の上、郵送・メールにて申込み <p>【応募説明会】 2022年6月15日（水）19時～20時</p> <p>【応募期間】 2022年6月1日（水）～6月22日（水）</p> <p>【結果通知】 2022年7月1日（金）</p>	<p>実施結果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・応募 5件 ・採用 4件 ・応募者所属内訳 <ul style="list-style-type: none"> 任意団体・・・・・・・・・・ 3人 公益財団法人・・・・・・・・ 1人 一般社団法人・・・・・・・・ 1人
	<p>選考のポイント</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会課題をテーマにした企画である ・広く一般を対象にした企画である ・多様な市民の参加が期待される企画である ・本フォーラムで波及効果が期待される企画である ・個人や所属団体だけでは実現が難しく、他団体との連携・協働が求められるような企画である ・自団体ですで行っている、または行うことのできる企画ではない

<第 2 章>

実 施 編

市民社会をつくるボランティアフォーラム TOKYO2023 開催概要

趣旨

「市民社会をつくるボランティアフォーラム TOKYO」は、私たちの暮らしに関わるさまざまな社会問題に焦点をあて、それを共有し、私たち市民にできることを考えていくためのイベントとして、2004 年から開催しています。企画運営は実行委員会形式で、分野、地域、セクターを横断したボランティア・市民活動に関わるメンバーで組織しています。毎年、参画した実行委員同士で問題意識を持ち寄り、協議を重ね、そのとき取り組みたい社会課題などを発信しています。

いま、災害、国際情勢、気候変動、貧困や孤立の問題など社会不安が増えています。そして、さまざまな情報が飛び交う中、何が正しい情報なのか見極めることがますます重要になっています。いまこそ私たち一人ひとりが何ができるのかをじっくり考え、みんなで議論して行動に移し、誰もが笑顔で過ごすことができるような社会をつくっていきたいと思います。そこで今年のテーマを「Think・Act・Smile[©]」としました。

会場、オンライン、フィールドワークなど、さまざまな参加方法でみなさんとお会いできるのを楽しみにしております。

開催概要

テ ー マ	Think・Act・Smile [©]
開 催 期 日	2023 年 2 月 10 日（金）19：00～21：00 2 月 11 日（土）10：00～20：00 2 月 12 日（日）10：00～17：30
会 場	飯田橋セントラルプラザ及びオンライン（Zoom）ほか
主 催	東京ボランティア・市民活動センター
企画運営	市民社会をつくるボランティアフォーラム TOKYO2023 実行委員会
後 援	東京都、特定非営利活動法人日本 NPO センター
参加費	1 分科会 1,000 円 高校生以下、または 18 歳未満の方 無料

参加者のべ数	441 名
出演者	58 名
実行委員・運営スタッフ・ボランティアのべ	199 名
全参加者のべ数	698 名

スケジュール

日	時間	会場	分科会	
2月10日 (金)	19:00~21:00	12階 AB 会議室	1 見えにくい貧困問題を考えてみよう～フードバンクの活動から～	
		12階 CD 会議室	2 「誰もが学ぶことができるまちをつくる」～市民の参加ですすめる障害者の生涯学習～	
		10階 AB 会議室	3 持続的な活動のために～資金づくりから考える～	
2月11日 (土)	10:00~12:00	12階 AB 会議室	4 みんなで考える多文化共生～多文化は日本に何をもたらすのか～	
		12階 CD 会議室	5 江戸川区ひきこもり実態調査から、行政とNPOの連携について考える	
		10階 AB 会議室	6 生活の中に笑いを～江戸時代の明るく笑って生きるにヒント～	
		陽ちゃん家(板橋区)	7 想いをつなげて、地域で作ろう!みんなの居場所【フィールドワーク】	
	13:30~15:30	12階 AB 会議室	8 やさしい日本語って、なんですか?～みんながつながることばを探そう～	
		12階 CD 会議室	9 誰かの「困った!」から始まるボラセンと地域の未来	
		10階 AB 会議室	10 私のボランティア活動は「何のため?」「なぜ続けているの?」	
	16:30~18:30	12階 AB 会議室	11 ボランティアのインセンティブって何だ?!矛盾する二つの言葉「有償・無償ボランティア」を考える	
		12階 CD 会議室	12 ボランティアの中心・飯田橋でモヤモヤを叫ぶ～施設の中はどうなってますか?ボランティアさんどうしてますか?～	
		10階 AB 会議室	13 「社会の現状から働く場のダイバーシティを考えよう!」～ガチャガチャ de ダイバーシティ体験会～	
	19:00~20:00	12階 A～D 会議室	14 会場&オンライン交流会「スマイル◎」(参加費無料)	
	2月12日 (日)	10:00~12:00	10階 AB 会議室	15 防災意識を高めよう!!～ほっとする食の確保と地域の支え合い～
		10:00~15:00	興望館(墨田区)	16 記録と記憶から振り返る関東大震災～市民による救援活動の源流を訪ねる～【フィールドワーク】
		10:00~12:00	国立館大学多摩キャンパス(多摩市)	17 東京の市民発電所を知ろう!～たまでん発電所見学会～【フィールドワーク】
13:30~15:30		12階 AB 会議室	18 もっと気軽にボランティア活動をしたい!～ボランティア活動の裾野を広げるためには～	
		12階 CD 会議室	19 コロナに負けない!学生たちの取り組みから学ぶ、活動運営のコツ	
10階 AB 会議室		20 若者にとって生きやすい社会って??		
16:00~17:30	12階 A～D 会議室	21 クロージング「考える 動いて笑顔 わたしから」(参加費無料)		
2月11日(土)・12日(日) 11:00~15:00	1階区境ホール	22 ふれあい満点市場～NPO・NGOの作品展示販売～		
開催期間中いつでも	10階フロア	23 情報誌『ネットワーク』表紙原画展		

No.1 見えにくい貧困問題を考えてみよう ～フードバンクの活動から～

開催目的

コロナ禍で、様々な問題が浮かび上がり、貧困問題はより見えにくく深刻化しています。中でも、制度にむすびつきにくい外国籍の方や、都市部に出てきた一人暮らしの大学生など、一言ではまとめられない「貧困」に陥るケースは様々です。フードバンクの活動から見てきた貧困問題。普段どのようなことに目を向ければよいのか、フードバンク府中の事例をもとに話し合いました。

開催日時

2月10日(金) 19:00~21:00

参加者数

28名(参加者19名:うちオンライン15名 会場4名、出演者2名、スタッフ7名)

出演者

照井 丈夫さん(NPO法人フードバンク府中 代表):左
大西 連さん(認定NPO法人
自立生活サポートセンター・もやい 理事長):右



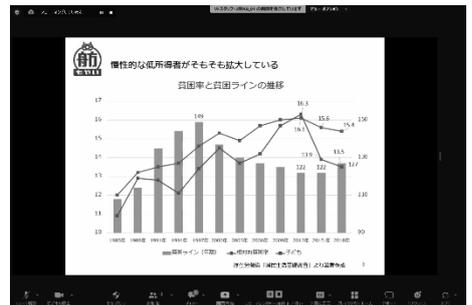
内容・成果・課題

<内容>

1. 大西さんのお話

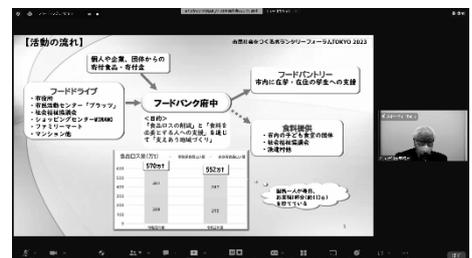
毎週土曜に新宿で食料の配布活動をしています。2020年当時は100人台だったのが、この3年で700人近くまで増えています。来ている方のほとんどは「生活不安層」の方。これまで自立しているとみられてきた、生活保護レベルではないが定常的な低所得にある方々です。この背景には、低所得層、特に非正規雇用が増えていることが挙げられます。生活保護ぎりぎりの収入では貯金もできず、仕事をしていても貧困状態と言えます。

これまで自立を目指す支援でしたが、コロナ禍で困っている方が支援につながらないという課題があることがわかりました。今の貧困は特別なものではなく、社会全体で生活不安を抱えている方がたくさんいます。不安を解消できる社会のしくみにしているのか考えることが大切です。



2. 照井さんのお話

フードバンク府中は2019年に設立、2022年6月にNPO法人化しました。学生が対象から抜けているのではと学生支援を始めて3年、150人を超える月もあるなど増加を続けています。学生は生活費を切り詰めるため一番削りやすい食事の回数を減らしています。支援学生の8割が留学生(中東・中央アジア・アフリカなど)で、宗教上の理由でNGな食材があるためハラル対応をしています。留学中に妊娠・出産、家族連れで日本に来て夫が失業など、言葉の問題以外にも様々な困りごことがあります。



活動をしてみて、大学との情報共有の大切さを感じました。困難を抱える学生に支援情報が届いておらず学校で孤立しているなど、見えてこなかった問題の可視化ができました。今の活動上の課題は次の3つです。①倉庫:一年後に解体予定ですが代替場所が見つかりません。②人員:個人々人への負担が大きく疲弊してしまいます。③資金:寄付金が主で安定していません。

3. 大西さん・照井さん二人の対談

大西さん「関わっている人はどんな方々ですか？」

照井さん「様々なボランティア経験者など多種多様ですが、年齢が高くなりつつあるのが懸念事項です。学生や企業もお手伝いに来ますが継続しません。持続性が大きなテーマです」

大西さん「第一歩を踏み出すきっかけは何でしたか？」

照井さん「はめられました笑。ただ、ほけないで済みます。代表を引き受けるのが一番のハードルでした」

大西さん「人から押されてでもいいから関わってみることが大事です。不純な理由でも活動を始めることで連鎖してつながっていきます。一人ぼっちで困っている方に情報や食料を届けるのは行政だけでは難しいです。住民がやれることはそこにあります」

照井さん「最初は学生が困っているとは思いませんでした。行政の支援は学生に弱いようです。活動して学生が身近になりました。論文でフードバンクを取り上げてくれる学生も出てきました」

大西さん「考えてるだけではあっという間にまた40~50年経ってしまいます。コロナを、社会を変えていくきっかけにしないとイケません。3年でもこれだけのことができます」



4. 質疑応答

Q1. 「大学生の貧困は何がきっかけでしょうか？」

A1. 大西さん「社会状況が厳しくなっています。学費の高騰のほか親も厳しく仕送りが減っています。奨学金を借りていてバイトをして勉強しているような状況です」／照井さん「学生からは卒業後を考えると今から貯金しないとまずいという声もあります。学生は支援制度の対象になっていません」

Q2. 「公の役割・市民社会の役割はなんでしょか？」

A2. 大西さん「公的な役割はお金を支援すること。所得が上があれば（負担が減れば）貧困の問題はほぼ解決しますが、今は自己責任の問題にされています。生きづらさ・つながれていなさの解消は市民社会の役割です」／照井さん「私たちの活動は本来なら行政でやってほしいものです。行政は何のためにあるのか役割を考えてほしいです」

Q3. 「留学生の声を拾って支援につなげるのは大変なことではないでしょうか？」

A3. 照井さん「メンバーに相談に長けた人がいて、その方のネットワークを活用しています」／大西さん「顔が見える関係ができていれば専門家につながりやすくなります。利用者や専門家と意識的にどう関係を作っていくのか、団体だけでなく中間支援団体の課題でもあります」

Q4. 貧困層が増えていく中、目標をどこに設定しているのでしょうか？」

A4. 照井さん「キャパオーバーになるとつぶれてしまうので残念ですが月150人でやむなく切っています。余剰の食料があれば個別に対応することもあります」／大西さん「総人口に比べればNPOで対応できているのはごくわずかです。しかし社会の認識が広がっていけば変わっていくのではないかと思います。やりたい人を後押しする、政策を作る、活動を支えるのが中間支援団体の役割です。多くの人々がそういう社会であってほしいと発信することが必要と考えます」



<成果および課題>

* 貧困の問題に対して我々に何かできることがあるのかと疑問に感じていましたが、直接的支援でなくてもそうした状況を変えていく環境づくりに中間支援の役割がある、ということがわかったのは大きな成果です。一方、こうした活動をどう具体的に支えていけるかについてはまだまだ大きな課題があると感じました。

* 今回のテーマは、どの地域でも潜在的に抱えている問題ではないかと思われます。アンケート結果をみて参加の特に中間支援の立場の方々、この企画で取り上げた様々な問題点が十分伝わったと思われます。

参加者の声（アンケート結果などから）

- ・テーマのとおり見えにくい問題であった。若者への支援の脆弱さを実感するとともに、声をあげて行動しなければ変わらないという大西氏の言葉が印象に残った。
- ・現場で感じた課題感や悩み、展望を率直に語ってくださり、非常に感銘を受けました。「地域に支えられている実感」という言葉が心に残っています。質疑含め、充実の2時間でした。照井さん、大西さん、スタッフの皆さま、ありがとうございました。

企画・運営

高橋 義博（府中市市民活動センタープラッツ/トライポッド）【主担当】

市川 徹（櫛世田谷社/一般財団法人世田谷コミュニティ財団）【報告書】

高野 まゆみ（一般社団法人江戸小湊つながりコーチング）【副担当】

No.2 「誰もが学ぶことができるまちをつくる」 ～市民の参加ですすめる障害者の生涯学習～

開催目的

文科省の調査によると、特別支援学校卒業生の高等教育機関への進学率は約 2.2%であり、約 92%が就職または障害者福祉サービスなどに進むという結果が示されています。

一方、「一緒に学習する友人、仲間がいない」「知りたいことを学ぶための場や学習プログラムが身近にない」という当事者の声もあります。

誰もが、障害の有無にかかわらず共に学び、共に生きる共生社会を進めるために、身近な地域において市民に何ができるか考えます。

開催日時

2月10日（金）19：00～21：00

参加者数

36名（参加者24名、出演者4名、スタッフ8名）

出演者

井口 啓太郎さん（国立市公民館）

加藤 沙耶香さん（町田市障がい者青年学級スタッフ）

福田 めぐみさん（荒川区社会福祉協議会）

細江 奈音さん（障害者団体主催のPC教室に参加）

内容

0. 国の動向について文部科学省の担当・福澤信輔氏（長野県社協から出向中）から報告。

https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2019/04/01/1414984_1.pdf

1. 井口啓太郎さん（国立公民館の活動から）

国立市公民館で社会教育主事として、しょうがいしゃ青年教室などを担当し、その後、文科省に出向し障害者の生涯学習を担当しています。2022年4月からは国立市公民館に戻り勤務しています。このテーマを考えるにあたっては、教育と福祉・医療・労働の各分野の連携が必要で、それがないと広がっていかないと感じています。これまでの障害者の「学び」は、18歳で終わっていることが多いです。趣味や学びなども生涯学習であり、人生を豊かにしていく重要な「学び」です。

国連で採択された障害者権利条約は、日本でも2014年に批准されました。この基本的な考え方は、「障害の社会モデル」といわれるもので、障害は障害者を排除する社会の側の問題であるという考え方で、障害者が参加できるようにするため合理的配慮が必要であるというものです。さまざまな障害者に対して、参加の障壁をなるべく低くしておく必要があります。そして、障害者だけを対象にした閉ざされた場とせず、誰もが参加できる場をつくっていきたいです。

2. 加藤沙耶香さん（青年学級スタッフの活動から）

私立の中学に通うようになって初めて地元以外の友達ができるとともに所属した生徒会で、自治運営・組織のために動くということの必要性を知りました。大学では何がやりたい訳でもなく、得意だった科目で理科系の大学に通い、勉強、バイト、遊びといった日々を過ごしたが、勉強するといっても単位を取るための勉強になってしまい、自分の将来と向き合うこともなく、本当の学び方を忘れていました。大学3年生の頃には、周囲は大学院への進学、インターンなどという雰囲気になっていったが、自分は進



学する気も、目標もない日々を過ごしていました。そんな中、たまたま目にした市報に「青年学級スタッフ募集」とあり、思いきって電話をしてみました。そこで社会教育に出会い、人生が激変しました。青年学級の活動に参加して、職員さんや支援者からの言葉、青年との活動で様々なことを学び、共に学び合う仲間や場所があることの重要性に気づきました。今は仕事ともなった青年学級で、「社会教育が科学反応を起こす」を合言葉に活動しています。

3. 福田めぐみさん、細江奈音さん（地域・当事者の視点から）
福田さん）荒川区社会福祉協議会ではアクロスという障害者の方々の日中活動の場を支援しています。細江さんは、そこでのPC教室に通ってきており知り合いました。

細江さん）PCを学ぶことで、最近ではオンライン（Youtube）を活用して、歴史・科学・落語・演劇など色々な分野を学ぶことができます。また、そのような機会も増えています。

中学まで通っていた特別支援学校は板橋区にあり、自力での通いでした。大変だったけれど、外に出ていく力がついたと思います。高校から通った特別支援学校（北区）では送迎があり、最初からこれほど楽をしてしまっていたら、外に出ようとは思えなかったかもしれないです。大学には進学しなかったですが、周りの同級生や学校が進学する環境であれば、進学していたかもしれないです。葛藤や衝突すらなかったです。それらがあれば、それを乗り切ろうとしてコミュニケーションが生まれたと思います。誰もが学ぶことができる選択ができるといいなと思います。



参加者の感想・意見

○障害福祉分野に興味を持っており、学びが少ないという面や共生社会に向けてという部分で、実際の事例を拝見することができ、とても充実した時間になりました。

また、行政として行っていることや民間として出来ることについてより深く理解することができました。この分科会に参加して、町田市のお話から、4月から社会人になる私自身にとって、学びの機会はいくらでもあるなどというところで共感できる部分がありました。

○障害者の生涯学習というテーマに興味を持ち参加しました。内容は、当事者、ボランティア、施策側の説明があり学びが多かったです。ただ青年学級の話が中心だったため、障害者たち×ボランティアの印象が強く残ってしまいました。バリアフリー、合理的配慮についてだけでなく、障害があるなし関係なくインクルージョンの視点で、一緒に学び、社会参加できるように出来る工夫など、もう少し深めたかったです。

○地域にいろいろな「参加の選択肢」を増やす必要があると感じました。

○繋がる、参加する、など行動することが大事だと改めて思いました。

○当事者の方が、学びの場に参加することは気が引けると発言されていて、長く分断されていたことで、この考えになってしまうことが、学びや社会参加への障壁になっていると感じました。

○誰もが学ぶことが出来る社会に向けて、まずは同じ席に座り対話から始めたいと思いました。

成果・課題

○教育分野と福祉分野にまたがるような話題であり、障害者も学びたいときに学べるのが当たり前になるにはどうしたよいか、それぞれの分野からの取組みについて話し合う機会ができたことは良かったです。

○皆が当事者意識を持ち、多くの方々の参画を得ながら検討していくことが必要と思われます。

○まだまだ、障害者の「学び」の場が少ない。そのために、合理的配慮が必要になることも含め、「学び」の環境づくりが必要と思われます。

企画・運営

高山 和久（東京ボランティア・市民活動センター）【報告書】

稲葉 圭亮（国分寺市社会福祉協議会 ボランティア活動センターこくぶんじ）【副担当】

足立 陽子（公益財団法人東京都人権啓発センター）【副担当】

太田 学（東京ボランティア・市民活動センター）【副担当】

No.3 持続的な活動のために～資金づくりから考える～

開催目的

ボランティアセンターをはじめ中間支援組織は、日々、活動団体から資金に関する相談が多く寄せられています。助成金の情報を持っていることも大事ですが、そもそも活動団体が活動のための資金獲得や資金形成をどのような機会と考えているのかを話し合いながら団体に伴走する必要もあると思います。この分科会では、助成金を活用しながら活動している団体、助成財団、助成の審査をしている方にお話をお聞きし、持続的な活動のための資金づくりについて一緒に考えることを目的としました。

開催日時

2月10日(金) 19:00～21:00

参加者数

38名(参加者27名:うちオンライン19名 会場8名、出演者4名、スタッフ7名)

出演者

栗林 知絵子さん(認定NPO法人豊島子どもWAKUWAKUネットワーク 理事長)

澤 雅弘さん(公益財団法人SOMPO福祉財団 事務局長)

鷺澤 なつみさん(公益財団法人トヨタ財団 国内助成グループ プログラムオフィサー)

安藤 雄太さん(東京ボランティア・市民活動センター アドバイザー)【進行役】

内容・成果・課題

1. 登壇者からの報告

(1) 認定NPO法人子どもWAKUWAKUネットワーク 栗林 知絵子さん

私たちの団体は、地域の中で有機的なゆるやかなつながりをつくることを目的に呼びかけてできた団体です。2012年に団体設立をし、2013年にNPO法人、2022年に認定NPO法人になりました。子どもの貧困をテーマに、さまざまな居場所づくりやおせっかいをしています。活動資金は委託が3分の1、助成金が3分の1、寄付が3分の1となっています。団体の特徴として、地域のボランティアなど一緒に活動する人がたくさんいることだと思います。

プレーパークから子どもや親子に関わる活動を広げていく中で助成金の存在を知りました。まずは、としまNPO推進協議会が行っている講座を受け、申請書の書き方を学びました。その後実際に助成金を取ることができました。助成金の書き方を学ばなければできなかったことだと思います。また、子どもの学習支援について、自主事業で行っていましたが、今では行政から補助金が出るようになりました。今行っている事業の中には、助成金を活用している活動もあれば、地域のNGOと連携して人件費を負担してもらって活動しているものもあります。

活動を1団体だけで行うのではなく、点から線や面として広げていくことで、社会に浸透していきます。振り返ると、子どもを大事に思う親から始まった活動に仲間が増え、助成金や補助金が後からついてきたと思います。自分たちだけではできないことをいろんな人たちに声をかけて一緒に活動していく、そうすることによって大きな力になっていくと思います。

最後に、持続的な活動のためには資金づくりと同じように、仲間のコミュニケーション、仲間づくりが大事です。仲間から資金につながることもあります。自分たちの活動をさまざまな人に相談して、一緒に連携してつくっていくことが10年活動してきた私が大切だと思っていることです。

(2) 公益財団法人SOMPO福祉財団 澤 雅弘さん

NPO基盤強化資金助成は、NPO法制定に伴い、NPO法人化への支援が重要であると判断し、始まった助成金です。NPO法人数が着実に増えたことから、2013年に認定NPO法人取得資金助成に変更しました。助成額は30万円とそれほど多くはありませんが、認定取得のための費用であれば使途を問わないことが特徴になっています。また、NPO法人設立後、多くの団体が資金や人材に苦労していることから、団体の組織強化に着目し、組織および事業活動の強化資金助成を始めました。

申請にあたっては、第三者の推薦コメントを必須にしており、その団体の実践だけでなく、第三者から見る期待や過去の実績を知る上で重要としています。中間支援組織の方には、日頃から事業の相談や

企業、行政、他団体などとの連携をサポートしていただき、推薦コメントを依頼された場合には、その団体の普段の活動や助成を申し込む内容、その効果についてできるだけ具体的に記載していただけるとありがたく思います。

どのプログラムでも継続性や資金源、協力者については選考時に話題に挙がります。市民活動として広がりを持つためには、地域におけるつながりが必要不可欠です。中間支援組織の方には、それぞれの団体の個性、活動内容、地域性、財政基盤をみながら当財団をはじめ各種助成金を活用していただき、団体運営、組織強化のアドバイスをお願いします。我々少人数で運営している助成財団にとっては、中間支援組織の方と連携させていただき、地域で頑張っている団体を応援していきたいと思っております。

(3) トヨタ財団 鷺澤 なつみさん

トヨタ財団の国内助成プログラムでは、大切にしていることが5つあります。①市民性・市民意識の醸成、②地域社会の中での活動の意義、③中間支援組織等との関わり、④目的達成に向けた仕組み・戦略づくり、⑤既存の価値観を問う視点です。特に、④については、2年間という限られた助成期間の中でよりよい成果を出すためにも、申請時点で具体的な計画ができている必要があると考えています。

トヨタ財団では、特定の団体ではなくプロジェクトチームに対して助成をしているため、助成金終了後の出口はさまざま考えられますが、団体側のニーズに応じて、助成期間中から助成終了を見据えた戦略・企画づくりをサポートしています。また、助成対象先同士の交流の場づくりにも取り組んでいます。中間支援組織への期待としては、地域内の団体や様々なアクター同士の連携・協働の基盤づくりや横のつながりづくりにも、ぜひ意欲的に取り組んでいただきたいと思います。また、トヨタ財団の場合は事務所が東京にしかないこともあり、活動団体の様子を日頃から把握することが難しいので、団体を近くで支えてくれる存在として、ぜひ財団の運営にも協力をいただきたいと思います。

最後に、トヨタ財団に限らず課題解決型の助成金については、現状の調査・分析をして、その上で社会に何が必要なのかという中長期的な視点が必要だと思っております。そして事業を展開する上で、それらをもとに、どのような関係者や関係性の構築をするか、なぜお金が必要なのか見据えながら動いていくことが大切です。その流れやイメージを申請書にも反映できるといいと思っております。

2. 登壇者同士でのやりとり

中間支援組織の役割や期待について議論しました。なかでも、申請時の段階で、助成終了後を見据えた企画書になるよう中間支援組織が関わるとよいという話がありました。



左から、安藤さん、栗林さん、澤さん、鷺澤さん

3. 今後の課題

持続的な活動のためには資金だけでなく人材（後継者）も大事であり、人が人を育てる循環的な仕組みが必要になるという話がありました。また、中間支援組織も人材難や組織基盤が弱くなっているという意見もありました。

参加者の声（アンケート結果などから）

- ・助成金はNPOにとって、とても重要だけど助成に頼りすぎると自らのアイデンティティを失いかねない。助成する側、助成を求める側はどう考えているかを知りたいことを期待しました。両者の考え方がわかり良かったです。
- ・助成元、中間支援団体と助成先の役割や関係性が知ることができとても勉強になりました。助成金を必要されている団体にできる支援は何か考えたいと思っております。

企画・運営

渡部 芽生（東京ボランティア・市民活動センター）【主担当・報告書】

熊谷 紀良（東京ボランティア・市民活動センター）【副担当】

No.4 みんなで考える多文化共生 ～多文化は日本に何をもたらすのか～

開催目的

人口減少社会、少子高齢化で働き手が大きく減少する中、外国人(労働者)はすでに日本社会に欠かせない支え手になっています。日本の多様な外国人の現状を知り、日本社会で活躍して頂く為にどんな課題があるか探ります。また多様化する未来に向け多文化共生のあるべき姿を考え、議論をするべく本分科会を企画しました。

開催日時

2月11日(土) 10:00~12:00

参加者数

39名(参加者26名:うちオンライン14名 会場12名、出演者3名、スタッフ6名、ボランティア4名)

出演者

◆メイン講師:毛受 敏浩さん(日本国際交流センター 執行理事、外国人材の受入れに関する円卓会議 事務局長、新宿区多文化共生まちづくり会議メンバーなど。)

◆ゲストパネリスト:

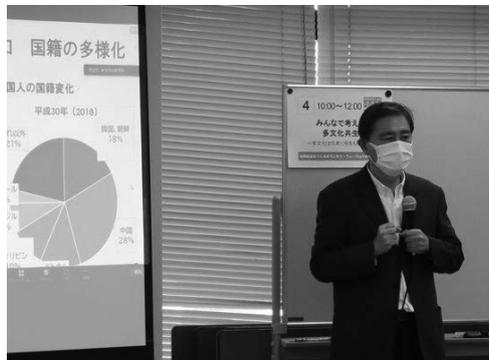
ウィリアム ルーさん(ノルウェー出身の華僑、ベルゲン大学で日本語を専攻。その後日本の大学院卒業後、外国人材紹介会社に勤務。日本の魅力は、多種多様な共生文化。)

ウランサリー イジーさん(インドネシア生まれサウジアラビア育ち。高校卒業後、単身で日本へ来日し大学から就活。日本のデータベース販売のベンチャー企業勤務で2年目。)

内容・成果・課題

1. メイン講座セッション

- (1) 日本の人口減少と外国人の増加の構造から日本の近未来を予測 人口激減⇒限界国家
- (2) 定住外国人の増加とその国籍の多様化
- (3) 在留外国人の現状と課題、支援の課題。
- (4) 政府の政策変化:公言せずに進む移民政策:2018年の入管法改訂で入管庁創設、新在留資格「特定技能」の創設、定住性の外国人の増加、留学生、技能実習生の急増。
- (5) 日本が「選ばれる国」になるために⇒政府は政策変更を明確にし、包括的な受け入れ体制を抜本的に構築すべし。国民・市民も多様性を受け入れる「意識改革」が必要。



2. 多様なルーツを持つ外国人若者のミニプレゼン

- (1) ウィリアムさんからは、日本での外国ルーツの人材紹介で体験談があり、日本独特の就活スタイルや雇用・職場習慣の課題が提示されました。同時に、日本での安心・安定した生活や、職場でも「気配り、心配り」、「兼ね合い」など日本独自の人間関係の温かみやバランス感覚も長所としてコメントされました。
- (2) イジーさんからは、インドネシアからサウジアラビアで高校卒業までの10代と18歳で日本にきてからの日本語・言葉の壁での戸惑いなどが紹介されました。大学では建築を学び、茶道会・茶道の世界にも入り、卒業までに裏千家の上級を取得。イスラムの教え(サラーム)と茶道の共通点(平和)があり、日本文化の奥深さを実



感。就職活動では、入社した後はスカーフ（ヒジャブ）は外せるか？などというつらい面談での質問もあり、外見で10数社も落とされて落ち込みました。日本の会社・職場や若者を見ていて、多様性に対する感受性などで課題を感じますが、日本独特の良さもあるので、これからも日本で頑張りたいと思います。それぞれの体験を中心としてライフストーリーが紹介され、彼ら彼女から見る日本の現状や課題を学ぶ機会となりました。

3. オープンセッション

- (1) 日本で働く事の原因とそのメリットと課題についてオープンセッション討議となりました。まだ残る年功序列的風潮や上下関係の難しさや労働時間が長い事、男性優位である事などの課題と、平和できれいな街、丁寧な合意形成やチームワークなど日本独特の良い面も指摘されました。
- (2) 話題をさらに広げて、すでに知らぬ間に日本は「移民受け入れ国」の流れが出来つつある中、一般市民としてどう感じているか、どのような事が取組として必要かなど会場や Zoom 参加者を交えて、対話、討議がなされました。
- (3) 毛受さんの指摘のとおり、この4年位で日本は移民受け入れに舵を切った時期にあるが、一部の日本人には、いまだに偏見や差別が散見されます。これまで技能実習生などを中心に一時的な日本の労働力として使い、いずれは帰国を前提とした受け入れを模索していましたが、それでは立ちゆかぬ事がわかり、定住外国人の増加と共に、マジョリティである日本人と共に真の「多文化共生社会」を模索していく時代になりつつあります。
- (4) 在住外国人の3大テーマである「日本語、家族教育、就労」それぞれについて定住を前提とした手厚い政策が必要で、彼らの就労や存在は、必ずや日本全体へのいい意味の刺激や貢献となります。一般市民も関心をはらい、寛容な受け入れの協力やボランティアができる事が地域のまちづくりや社会の発展となると思われます。このような対話や意見交換がなされました。



参加者の声（アンケート結果などから）

- ◆外国人の方々のリアルな意見を聞いて、貴重な体験となった。
- ◆時間が足りないほど、もっと深く、掘り下げたいテーマでした。
- ◆今後も多文化共生についてのボランティア活動やセミナーなどに参加して日本の将来について考えていきたい。

企画・運営

村尾 憲治（多文化共生プロジェクト）【主担当・報告書】
 鹿住 貴之（認定 NPO 法人 JUON NETWORK）【副担当】

No.5 江戸川区ひきこもり実態調査から、行政とNPOの連携について考える

開催目的

ひきこもり状態にある人は、内閣府調査によると15歳から39歳までが54.1万人（平成27年度調査）、40歳から64歳までが61.3万人（平成30年度調査）、合計115万人を超えると推計されています。

江戸川区では実態把握のため、2021年度18万の世帯にアンケート調査が行われました。この分科会では、ひきこもり状態にある方の支援について、行政調査を事例に、行政とNPOの連携について考えました。

開催日時

2月11日（土）10:00～12:00

参加者数

36名（参加者24名：うちオンライン17名 会場7名、出演者3名、スタッフ7名、ボランティア2名）

出演者

森澤 昌代さん（江戸川区福祉部生活支援第一課ひきこもり施策係）
中塚 史行さん（一般社団法人子ども若者応援ネットワーク品川）
椎野 修平さん（NPO法人日本NPOセンター 特別研究員）

内容・成果・課題

分科会のはじめに、江戸川区ひきこもり施策係の森澤さんより、令和3年度に実施した「江戸川区ひきこもり実態調査」の目的や結果について、発表をいただきました。また、調査結果後の取り組みについても紹介されました。

1. 江戸川区のひきこもり支援施策について

2021年度、江戸川区では18万余の対象世帯にアンケートを送付して調査が行われました。その結果、10万余の世帯から回答があり、回答率は57.1%にのぼり、7,919人のひきこもり当事者が把握されました。人口が多い区市町村で行われた実態調査としては、全国的にも稀な事例です。

この調査は、ひきこもりで悩んでいる方を特定し、より多くの方を個別支援につなげることを目的に行われました。よって、2022年度は個別支援につなげていくために、2次調査が行われました。郵送でのアンケートや実際に個別訪問が実施されました。新規の相談ケースにつながった人が、400件にものぼったということが話されました。

江戸川区では、ひきこもり相談支援をNPOに委託が行われています。また、ひ



きこもり状態の方・ご家族向け講演会やオンライン相談会が定期的に関催されています。また、当事者や家族への切れ目のないきめ細やかな支援を行うことを目的として、江戸川区ひきこもり支援協議会が立ち上がっています。森澤さんは、当事者の方と信頼関係を構築していくことの重要性を強調されたことが、印象的でした。



つぎに、品川区と連携し、子ども若者の居場所を運営する子ども若者応援ネットワーク品川の中塚さんに、事例を発表いただきました。

2. 子ども若者応援フリースペース（東京都品川区）

「安心できる」「自信がつく」「仲間がいる」をコンセプトとし、小学生から若者まで、誰でも分け隔てなく利用できる居場所として、月曜日から金曜日の10:00～19:00まで無料で利用できるのが、「子ども若者応援フリースペース」です。

品川区から委託される前から、フリースペース活動が行われており、不登校、発達障害、若者支援などに

ついての経験と専門性をNPOが持っていました。

行政との連携としては、日常的なつながりも密に行い、困難なケースについても共有をしているとのことでした。月1回開催される運営委員会では、行政職員とネットワークメンバーで、運営の報告や相談が行われています。また、担当部署だけでなく、保健センター、教育センター、生活福祉などの部署とも協力していると報告されました。

3. 行政とNPOの連携

日本NPOセンターの椎野さんから、全体のまとめとして、NHKスペシャルに寄せられた、レスターサラモンのメッセージが紹介されました。

- 公共の仕事はすべて政府でやってくれるという20世紀の常識を、一度疑ってみること
- 市民の力だけで公共を支えられるという意味ではない
- 市民が主役となって政府や企業と新たな関係を構築していく姿こそが、健全な市民社会

複雑化する社会課題に対して、「意思決定権」を市民に近づけるために何ができるのか、両者が真剣に考える必要があると、提起されました。

参加者の声（アンケート結果から）

- 行政委託事業・子ども支援の事業に過去携わりましたが、行政担当者の思いや現場の理解の重要性を感じていました。委託元・委託先という関係ではなく共に子ども若者を支えるパートナーとして協働できることが大切だと改めて感じました。それぞれの生き方や考え方が認められる社会になってほしいと思います。
- 江戸川区の調査について、ひきこもりの実態、行政としての関わり方や今後の政策等についてお聞きでき大変良かったです。家庭内の問題として扱われがちで、家庭内だけで解決しようとしているのかと思います。江戸川区の取り組みのようにまずは相談窓口がありますよ、と市民に周知することによって、助けを求める声が上がってくるとのお話を聞いて、行政という安心感があるからこそだと思いました。NPO法人の中塚さんは地域の子ども食堂の方がスタッフにいたり、食事の要素を取り入れながらいろんな角度から若者支援をなさっているとのこと興味深く拝聴いたしました。地域福祉の推進を図る中で、自分の立場でどんなことができるのか、考えていきたいです。

企画・運営

上田 英司（NPO 法人日本 NPO センター）【主担当・報告書】

正田 理沙子（NPO 法人グッド!）【副担当】

No.6 生活の中に笑いを ～江戸時代の明るく笑って生きるにヒント～

開催目的

素直に笑えない現代社会。一方江戸時代は災害疫病、貧しい中でも、心豊かな人同士の共生社会、自然との共生社会で、庶民は大らかに笑い、町中に笑いにつながる物が多くあり、そこを紐説きます。前半は大石学先生から江戸時代のお話を伺いました。日常にあった笑い、社会的背景にあるもの、笑える文字、言葉など何が出てくるかはお楽しみに。後半はそこから学び合い、皆さんで気づきを共有しながら、今に活かせることも一緒に話し合しましょう。江戸気分も味わいながら、地域活動でも笑い声を増やして、楽しさにつなげるヒントを見つけていきます。

開催日時

2月11日(土) 10:00～12:00

参加者数

29名(参加者22名:うちオンライン12名 会場10名、出演者1名、スタッフ5名、ボランティア1名)

出演者

大石 学さん(東京学芸大学名誉教授 独立行政法人日本芸術文化振興会監事 時代考証学会会長)
高野 まゆみ(実行委員 一般社団法人江戸小断つながりコーチング ※ファシリテーター)

内容・成果・課題

1. 大石学先生の講演内容 【江戸庶民のリテラシー】
 - (1) 現代社会 日本も世界も価値喪失の時代と言えます。共存共栄ではなく、格差、環境、競争原理、ヨーロッパの普遍性でいいのでしょうか?私達は善悪などの二元論ではないバランスを取る力が求められています。個人も社会も人類も問題解決につながらない時、江戸の教育が力を発揮できるのではないのでしょうか。
 - (2) 歴史では戦国時代中世から近世への変換が大事で、近代の生活基盤を作ったのが江戸時代と言えます。この時代は遅れた封建制ではなく、初期近代性アーリーモダンを江戸に見ます。明治維新との断絶を見るよりも、初期近代としての位置づけの方がよりリアルではないのでしょうか。兵農分離後、専門の武士団が城下町に集まり、生活を支える町人が住み着いて巨大都市ができました。武士も町人も文書で要求を持っていくようになり、官僚化した武士が台頭して、農村も自治が発達し、印刷文化も栄えました。貧しくて悲惨ではなく、格差が小さく、みんな幸せに生きている日本の良さと言われるものは、すでに江戸が獲得していました。江戸を見直し再評価するといいと思います。
 - (3) 解決のヒント 平和を基礎から支える江戸の教育力と笑い
誰でも学びたい時に、学びたい場所に行けるのが、江戸の教育力の魅力です。江戸の教育は、幕府の学校、藩校、私塾、郷校、寺子屋があり、平和を下支えしました。教育によって、暴力ではない解決の仕方を学んでいく土壌システムがありました。「学びたい」で動く、そこが本当の学びで、知った楽しさからもっと知りたい人が沢山いて、学べる機関があって、個人の意識が戦争と違う方向へいかせたのでしょう。城下町の武士団を支える町人農民も、文書でやり取りをする関係がありました。
 - (4) 古典作品 江戸の文字リテラシーが伝える笑いを共有する社会「川柳」と「江戸小断」の紹介
「国の母 生まれた文を 抱き歩き」生まれた知らせを文にしています。識字率の高さが伺えます。
「川止めに手にはを直す旅日記」全部歩く旅の非効率性が、地域間の平等性を維持していました。
「寝て読んだ 文まんなかで 起き上がり」/「万の字も 書くにも一が はじめなり」
「楽屋では 頼朝公の 部屋はなし」芝居で下の役者が務める役ですが、歴史の知識も伝わります。

江戸小唄：当時は年齢・性別・階級・職業の違いを超えて、読み書きのリテラシーを身に付けていました。小唄は笑いを伴い、平和と文明化はこうした笑いを共有する社会による文化・教育の発展を基礎に達成されたのです。

小唄で江戸気分「お姉さん、粋だね」「帰ります」「お母ちゃん、パンツ破れた」「またかい」

・質問：笑いの文化やリテラシーという視点から、江戸と上方の違いはあるのですか？

回答：江戸初期は上方文化が強く、アレンジしていきました。

江戸の笑いは知性と気っ風があって、上方の笑いはもう少し親しみをベースにして生活に密着しています。江戸後期は江戸を発信地とする文化が全国に行き渡りました。川柳は江戸で始まりオリジナルです。地方でも真似して、みんなが染まってきました。笑いが一方で普及していくのは間違いないと思います。



2. 参加者の気づき・成果

- ・面白い市民講師を紹介してほしい要望が多く、笑いを求めている今、シニアで笑いをという事を普及したいと思っています。ユーモアシニア川柳、シニアせんと言います。
- ・登録ボランティアアンケートでも文通をやりたい声が多くあり、文字社会を再評価しなければと強く感じました。絵手紙にイラストや小唄を添えることも出来ると思います。
- ・講師 手紙は人格的なつきあいになるのか、母は手紙が来ると捨てずに取ってあります。活動もノルマになると笑にくいから、自然に笑えるような少し枠を広げてみると面白いかもしれません。
- ・江戸時代に言葉と文字が溢れており、それが他人への理解と共感につながり 250 年もの平和につながっていたのではと思い、現代における言葉と文字の扱い方をとても考えさせられました。
- ・地域高齢者の方はおしゃべりに飢えていて、楽しい出来事を共有したいのだと思います。地域の居場所、楽しく笑いを取り入れたいと思います。
- ・興味が広がり、帰りに図書館に行こうと思いました。

3. 今後の活動課題は何ですか？

- ・相手と比較するのではなく、今回のように楽しく学ぶことも大切だと思いました。
- ・古典の中から素敵な笑いを学べる講座ができたらと思いました。
- ・自分も満足するまでやり切るという力がある事は大事なと感じました。
- ・平和で助け合える平等な生活を思う時、江戸に見る自由が受け入れられる教育環境があったこと、自分の考えで納得するまで学んだやる気と活力、文字を通した言葉文化の楽しさを取り入れてみるなど 1 歩踏み出すヒントになりました。江戸の再認識ができました。（担当）

参加者の声（アンケート結果などから）

- ・笑いは日常に散りばめられていて、いかに気づき、みんなで話し楽しんでいくかだと思いました。
- ・聴覚だけでなく、視覚（文字・絵）も取り入れたコミュニケーションのヒントをいただきました。
- ・言葉の伝え方（川柳から）広めることの大切さを学んだように思います。

企画・運営

高野 まゆみ（一般社団法人江戸小唄つながりコーチング）【主担当・報告者】

枝見 太郎（一般財団法人富士福祉事業団）【副担当】

No.7 想いをつなげて、地域で作ろう！みんなの居場所

開催目的

多世代が集まる「ごちゃまぜの居場所」が地域にあるといいと思いませんか？

本分科会は、「ごちゃまぜ」を目指し、みんなで企画を考えながら、空き家を活用している居場所「陽ちゃん家」を実際に訪問するフィールドワークです。居場所の見学を行った後、参加者みんなで、どんな居場所が地域にあるといいのか、どんな企画で、どんな人を巻き込めると面白くなるかを考えます。居心地のいい居場所とはどんなものなのか、それをどう実現するのか、一緒に考え、各自がヒントを持って帰り、地域で活動するヒントにしてもらいたいと企画しました。

開催日時

2月11日（土）10：00～12：00

参加者数

16名（参加者9名、出演者2名、スタッフ4名、ボランティア1名）

出演者

藤井 純子さん（NPO 法人ドリームタウン 理事）
木村 陽一朗さん（地域活動拠点「陽ちゃん家」家主）

内容・成果・課題

1. 家主の木村さんから居場所への想いを聞く

「陽ちゃん家」家主の木村さんから、ご自身が育った家が「地域の居場所」となった経緯をお伺いしました。ご自身はすでに別の場所に暮らしていますが、お母様が施設に入られたことをきっかけに、思い出たくさんの家を地域の役に立てたいと思ったことがきっかけです。

しかし、どこに相談しても不動産ビジネス以外の提案がなく、近くの小学校で剣道をしていることもあり、そのつながりで居場所を運営しているNPO法人と出会いました。「価値観の違う多様な人々の集う場」への想いが一致し、2021年7月に「陽ちゃん家」としての活動がスタートしました。家主の陽一朗さんとお母様の名前から、「陽ちゃん家」と名付けられました。

お話を聞いた後は、木村さんと弟の琢也さんの2人から、「陽ちゃん家」を案内していただきました。当時の暮らしの様子やご家族の思い出の品なども紹介いただきながらの見学となり、昭和の雰囲気は何とも言えず懐かしく、和やかな雰囲気になりました。

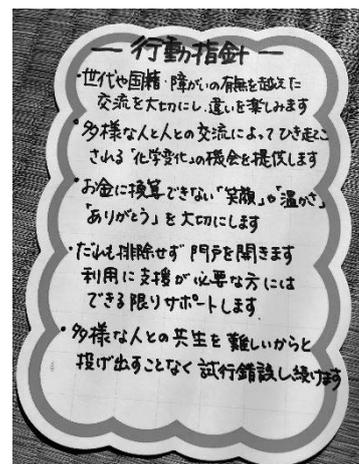


【右が家主の木村さん、左が弟の琢也さん】

2. 藤井さんからドリームタウン、「陽ちゃん家」での活動紹介

NPO 法人ドリームタウンは、「陽ちゃん家」を含めて、板橋区内の3か所で居場所を運営しています。「孤立しない地域づくり、一人ひとりの個性を大切にする」などの『行動指針』をベースに、各居場所の特徴にあわせて様々な活動を行っています。

「陽ちゃん家」では、月に1回の子ども食堂、他の団体と協力しての月に2回の赤ちゃん食堂や認知症カフェなども行っています。他にも持ち込み企画的に韓国の食と文化を学ぶイベントや庭のミカンを使ったマーマレード作り、大学生を中心とした椅子づくりなど、多世代が出会い、一緒に活動できる企画なども行っています。



企画については、家主の木村さんとも相談しながら、「陽ちゃん家」の趣旨にあうかどうかを確認しながら行っているそうです。



3. みんなの気になること

- ・資金源は？ — 助成金や食材寄付、フードパントリーや個人からの寄付
- ・住宅街の中で苦情は？ — 家主の木村さんが始める前に近隣に挨拶してくれていた
- ・子ども食堂には大人も参加OK？ — 大人だけでも利用可能（大人NGの場所もあるとのこと）
- ・営利企業への貸し出しも可能？ — 地域とのつながりが目的かどうか、基本理念にあえば可能

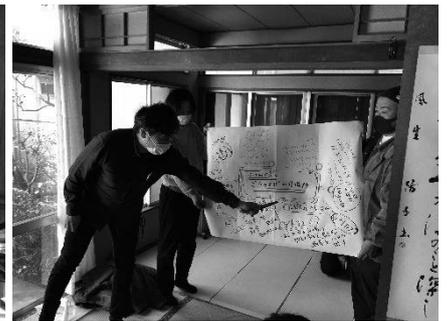
他にも、自宅をデイサービスに使ってもらおうと思ったら耐震化や避難経路が求められたという方や食事を出すには保健所の許可がいるなど、居場所を実際に運営するには乗り換える必要のある課題があることも見えてきました。

4. 参加者みんなで考える、居心地のいい居場所

最後は、参加者一人ひとり自己紹介をした後に、3つのグループに分かれて「あったらいいな居場所」をテーマに、どんな居場所を、どう作っていくかを考えていきました。

多くのアイデアが出されましたが、共通していたのは、多様な世代の人が、それぞれの得意を活かして居場所に関わっていけること。例えば地域の高齢者が昔遊びを教える、子どもをみんなで見守りながら子育て世代がホッとできる、ミニ図書館やイベントなどで、普段出会えない人同士が出会える場などの意見や24時間行ける場所という意見もありました。

ただ、継続した運営には人的、資金的なハードルもあります。参加者のみなさんが、今回のアイデアを持ち帰り、各自の活動のヒントにしてもらえたらと思っています。



参加者の声

- ・現在の社会問題を取り入れつつ、この場を通して、どのように解決することができるかを話し合ったことが自分の活動にも活かせそうです。
- ・同じく居場所づくりに取り組んでいるのですべて参考になりました。資金面の運営方法など課題を感じており、場を提供していただく方を探すことにも課題を感じており、参考にさせていただきます。
- ・地域と人をどう結びつけるかが現在の課題です。NPO 法人と協力して、更に広げていきたいと感じました

企画・運営

神元 幸津江（認定 NPO 法人全国災害ボランティア支援団体ネットワーク）【主担当・報告書】
水田 征吾（ちょうふチャリティーワーク）【副担当】
高山 功平（株式会社ネオキャリア）【副担当】

No.8 やさしい日本語って、なんですか？ ～みんながつながることばを探そう～

開催目的

いま、東京都に住んでいる住民の約4%が外国籍です。日本全国では約300万人を数えます。日本以外の国にルーツを持つ子どもも増えています。彼らは生活や仕事の場におけることばの面で、特に日本語学習の途上にある方々が日本人に望んでいること、それは<やさしい日本語>で話したり、書いたりしてほしいということです。日本語に不慣れな人たちがことばとコミュニケーションの何に苦慮しているのかを紐解き、日本人側がどのように接したらいいかを学び、考える場としました。そして、参加者が<やさしい日本語>をコミュニケーションの一つにしてもらうことを目的としました。

開催日時

2月11日(土) 13:30~15:30

参加者数

46名(参加者33名:うちオンライン19名 会場14名、出演者2名、スタッフ7名、ボランティア4名)

出演者

吉開 章さん (やさしい日本語プロデューサー 柳川観光大使)
鬨 志超(カン シチョウ)さん (中国出身日本在住 IT企業社員)

内容・成果・課題

1. 内容

(1) 登壇者 吉開さんから、やさしい日本語について

日本在住外国人の88%は日本語の会話が少しでもできると回答した調査結果(令和2年度 出入国管理庁調べ、以降同)が示されました。その上で外国人とのコミュニケーションには英語という常識を見直し、相手に応じてやさしい日本語でコミュニケーションをとることが必要であると説明しました。やさしい日本語とは、吉開さんの定義では「日本語を母語としない外国人など、日本語の理解やコミュニケーションになんらかの困難を抱えている人のために配慮された日本語表現」ということです。

やさしい日本語には使い方のルールがあります。はっきり言う、さいごまで言う、みじかく言う、この3つのルールの頭文字をとって「ハサミの法則」です。氏が明治大学の学生らと作った日本語ラップ動画『やさしいせかい』を鑑賞ののち、日本語母語話者である多くの日本人が実感していない、外国人が感じている日本語や日本人とのコミュニケーションの難しいポイントについて一つ一つ紐解いていきました。例えば、サラサラやウキウキなど擬音語・擬態語は分かりにくい、尊敬語や謙譲語は難しい、簡単なことば同士でも組み合わせると難しい、などです。これらは外国人のみならず、視覚障害者や聴覚障害者による日本語理解の困難さにも通じると指摘しました。

また、外国人に対する日本人の態度や行動にも言及しました。例えば店でオーダーの際、注文している当事者ではなく同行者(多くは日本人)に返事をする「第三者返答」という行為の説明がありました。これは当事者にとって大変不快であり、車椅子ユーザー等への態度にも重なると述べました。

まとめとして、やさしい日本語は外国人だけを対象にしたものではないことが述べられ、私たちのこれからについて下記3つの提案がありました。

- ・言葉の問題は、やさしい日本語で乗り越えよう
- ・言葉で解決できない問題は、違いを認め合う気持ちで乗り越えよう
- ・やさしい日本語から始まる、情報保障のある社会をつくろう

(2) ゲストスピーカー 鬨(カン)さんから、日本語や日本の生活について

日本在住外国人の視点からお話いただきました。鬨さんの日本での生活は5年目を迎え、日本の生活で困ったことが2つ挙げられました。まず引っ越しの手続きと賃貸契約が煩雑、かつ外国人であることから条件が厳しいということ。次にビジネス文化やマナーで戸惑うことが多く、外国人に向けてのルールを用意したらもっとスムーズに働けるのではとの提案がありました。

もう日本語の苦労はないように見受けられる鬨さんですが、しばしば日本語の困難にぶつかっているとのこと。職場での早口や難しい用語、また雑談でのタメ口や流行語、オノマトペも理解できていないと感じることが多いそうです。多くの外国人はネイティブレベルではないので、話す時は簡単なことばを使って少しゆっくり話してもらえたら理解しやすいと思うと述べました。そして自分はネイティブレベルを目指して日本語能力をアップしていきたいと締めくくりました。

(3) グループディスカッション：二人の話を聞いて、その感想とこれからの自分について

吉開さん、鬨さんも加わり、会場とオンラインそれぞれでグループディスカッションを行いました。やさしい日本語について、共有された意見は3つのポイントに集約されました。1. 「ハサミの法則」の有用性と伝え方への配慮、2. 外国人、障がい者、認知症の方々も含む日本人みんなに必要な、3. 実戦は難しいが広めていきたい



2. 成果

やさしい日本語について事前の認知度はまちまちでしたが、吉開さんと鬨さんのお話やグループディスカッションを通じて、参加者の皆さんには共通認識とともにより広い視点を持っていただけました。なぜやさしい日本語が日本の社会で必要なのか、またどのように使うのかそのルールを知ってもらうことができました。人とのつながりを広げる方法の一つをお伝えできたと思います。

3. 課題

母語話者同士の間で使っている日本語をどのようにやさしい日本語に変換していくのか、参加者自身がその実践を通して理解する場が必要と感じています。やさしい日本語を必要としている方々とともにそのような場を設けられたらと思います。

参加者の声（アンケート結果などから）

- ・相手に伝わる言葉でなければコミュニケーションとは言えない！ということが強く心に残りました。
- ・ハサミの法則のおかげで外国人の人との接し方が変わりました。
- ・相手に伝わる言葉を選んで話すことが仕事でも家庭でも大事だと思いました。外国人や障害があるないにかかわらず、人同士のコミュニケーションの手段の一つとしてやさしい日本語が取り入れられていけばいいと思います。
- ・自分のためにではなく、相手のために、日本語を使えるようになりたいです。

企画・運営

宮田 るり子（やさしい日本語ファシリテーター）【主担当・報告書】

犬塚 尚樹（NPO法人ふれあいの家 おばちゃんち）【副担当】

No.9 誰かの「困った！」から始まるボラセンと地域の未来

開催目的

ボラセンって何？必要なの？指先ひとつでいくらかでも検索できる時代に、人が間に入り繋いでいくことでどんな効果があるのか説明するのは難しい部分もあります。そこで本分科会では日々、誰かの「困った！」に向き合い、柔軟な発想で活動を具現化させたり、コラボを生んだりと対応しているいろんなボラセンの事例に触れながら、ボラセンが地域とともに育む未来について語ろう分科会です。

開催日時

2月11日（土）13:30～15:30

参加者数

29名（参加者20名：うちオンライン10名 会場10名、出演者3名、スタッフ6名）

出演者

秋田 有加里さん（愛知淑徳大学コミュニティ・コラボレーションセンター）

阿部 剛さん（まつど市民活動サポートセンター センター長）

鈴木 祐司さん（荒川区社会福祉協議会地域ネットワーク課荒川ボランティアセンター センター長）

内容・成果・課題

1. それぞれの活動現場での事例紹介

（1）コロナ禍での大学ではじまった「困った！」から始まった活動事例（秋田さん）

緊急事態宣言を受け、帰国が出来なくなった技能実習生の生活支援を行っていたお寺の住職さんから相談を受けて、大学生たちがオンラインで日本語を教え始めました。ステイホームを余儀なくされた学生にとっても貴重な交流の時となりました。それをきっかけに、他の「困った！」があることを知り、他大学や行政機関との連携・企業に相談して大学のボランティアセンターだけではできないこと周りの人たちに助けられながら対応しました。技能実習生が母国に帰った今もオンラインでの交流が続いています。



技能実習生たちが真剣に画面に向かい、勉強に取り組んでいる様子など、写真を取り入れながら事例を紹介いただきました。

（2）「やりたい！」を支援している立場からの活動事例（阿部さん）

課題アプローチ型ではなく個人が持つ探求心を支援することで、地域を活性化している事例です。高校生～アクティブシニアにアプローチする事業を軸に、個人がより活躍できるよう支援しています。それが結果として人材の循環となり、自己実現につながり、お互いが心地よいつながりを生んでいます。

「誰かのために」も大切だけど「自分がどうしたいか」を軸に考えていくことでモチベーションを上げていくサポートしているそうです。

住むだけの街を、人生楽しむ街に変える



（3）企業との連携による活動事例（鈴木さん）

企業として「地域貢献したい」とJRの貨物駅である隅田川駅より相談があり、企業のこれまでの実績やスキルを活かしながら新しいプログラムをともに作りました。普段一般人が入れない隅田川駅体験ツアープログラムを企画。未就学児とその保護者を対象とした。場を解放することで、職員も地域の方々と触れ合うことができモチベーションUPにつながったとのこと。企業に作成いただいた動画もみながら活気のある様子を知ることができました。

2. 事例を聞いてより聞きたい事を深堀り

事例紹介を聞き、参加者にとってのボランティアセンターについて・感想などをグループワークにて共有いただき、その中でより深く知りたいテーマの質問を受け、登壇者全員が考えました。

① 企業との連携の仕方

企業として何がしたいのか。どう生かしていけばいいのか。話をしっかり聞き一緒に考えていくことが大切。昨今SDGsとして何かしなければという企業が多く、相談してみると受け入れてくださる企業も多い。協賛としていただくこともあるが、事業に対して企業としてのメッセージをのせられるようにすることで、フィードバックも含め共通体験をもて、達成感がえられるようにしていくことを大切にするといい流れになる。

② 相談者が抱えきれない案件の対応の仕方

ボランティアセンターはより多くの人とつながり、多くの社会資源をもっている。つながっているということが強みになる。「困った！」と相談を受け、受けた側が「困った！」と思ったのであれば、その相談をつながっている人や団体につなげていくことで解決できることがある。だからこそボランティアセンターは無数の可能性を持っている。

ボランティアを送り出す中で様々な事例を目の前にし、心が苦しく泣くこと、自分の無力感にうなだれることもある。しかし、目の前に相談者がいる以上、そこから目をそらすのではなく、真摯に対応し続けることが求められていると感じている。

時によらず相談のような相談から業務の範疇を超えることも中にはあるが、他の機関につないでいながらつながり続けること。周囲の人を傷つけてしまう人がいれば、制御しながらもその人のその先について考えることも、目の前の人と向き合うことと考える。

3. ボランティアセンターにとって大切なこと

深掘りした2つのテーマはカラーの違う話の印象を受けたが、どちらも目の前の人と向き合い、受け止め、信頼関係を気づき、つないでいくというキーワードは同じとなったのが印象的でした。シンプルで基礎的なことではありますが、それらを真摯に対応し続けることが大切と感じました。

4. ボラセンの未来

・自分らしくいられる場所の一つとしてボランティア活動があると思う。そんな場所を丁寧に作っていきたい。そしていろんな人を繋いでいく場所として市民の方に知ってもらえるよう頑張っていきたい。(秋田さん)

・今はセンター長という立場だが、今から次の世代に自分が持っているものを渡していくということを意識している。循環していかないと時代に合わないセンターになってしまう。(阿部さん)

・ボランティア活動は地域を問わないし、年代を問わない。災害ボランティアをみると地域を超えてたくさんの支援者が集まる。それは凄いこと。大変な時に「困った！」と発信でき、「困った！」と発信しているところがあれば助けることができるボランティアセンターが色んな所にあるといいと思う。(鈴木さん)

・ボランティアセンターの職員として悩むことが多かったがみなさんのお話をうけ、現場に出て話をきき、つないで信頼を得ていくことで地域の方から評価されていくのだと改めて感じた。地道なことの繰り返しでもしっかりと向き合っていくことで未来につながっていくと思う。(企画者)

参加者の声(アンケート結果などから)

・つながりつづけること、自分自身も困ったと思ったことを広く伝えてアクションし、共有していくことは今後自身でもできると思った。

・短期のボランティアの役割しか知らなかったため、長期的にかかわることの必要性やボラセン側からのアウトリーチする場合があることも理解しました。新たな発見をすることができました。

・困りごとを聞きに回る(地域に出ていく、アウトリーチ的なもの)ことも大事だが、今回の話であったように、やりたいことを続けていった方が、結果、同じところにたどり着くような気がしてきました。

企画・運営

阿南 有紀(渋谷区社会福祉協議会しびやボランティアセンター)【主担当・報告書】

芦澤 弘子(聖学院大学 ボランティア活動支援センター)【副担当】

No.10 私のボランティア活動は「何のため？」「なぜ続けているの？」

開催目的

ボランティア活動をしていると、「何のため？」「なぜ続けているの？」など、当初の想いとは別にこのような迷いを抱くことは珍しいものではありません。本分科会は、講義や事例紹介、グループワークを通して、そのような迷いにも踏み込みながら、自分らしいボランティア活動のあり方について見つめ直す機会となるよう開催しました。

開催日時

2月11日（土）13：30～15：30

参加者数

28名（参加者18名：うちオンライン9名 会場9名、出演者3名、スタッフ6名、ボランティア1名）

出演者

川田 虎男さん（聖学院大学ボランティア活動支援センター アドバイザー）
川村 克朗さん（SDGs いたばしネットワーク、地域コミュニティ『蓮根まちの学校』 リーダー）
小汲 唯奈さん（VIOLET!!、Brailles（ブレイリーず） 理事）
水田 征吾（実行委員、ちょうふチャリティーウォーク実行委員会 実行委員長）

内容・成果・課題

本分科会では、日頃よりボランティアに携わるの方々をパネリストとしてお呼びし、ボランティアを始めたきっかけや、現在もボランティアを続けている理由について語っていただきました。それら話の内容を踏まえ、講師よりボランティアに関する講義をいただきました。参加者の方々にとって、ご自身のボランティア活動を再確認する時間となり、これまでに抱えてきた活動に対するモヤモヤが整理されることで、自信をもって取り組むことができるきっかけとなる機会となりました。

1. ボランティアを始めたきっかけは些細な一歩から

3名の異なる世代（定年退職、働き盛り、学生）の方々にパネリストとして登壇いただきました。

（1）川村さんは、定年退職近くまで「会社人」として過ごされたため、地域とのつながりは全くありませんでした。何か地域に関わることはできないか、知人に相談を始めたことをきっかけに今の活動（SDGs いたばしネットワーク）につながるようになりました。

（2）小汲さんは、視覚障がいがある自分でもボランティアできないか、ボランティア団体を探しましたがなかなか受け入れてもらえる団体は存在しませんでした。そんな中、東京ボランティア・市民活動センターに相談にいったところ、中高生のボランティアグループ VIOLET!! を紹介され、今も当団体を中心に活動されています。

（3）水田は、ボランティアに関心はあったけれども機会に巡りあえず、ある年、地域イベントのボランティアを知り、近くで始められるということでボランティアに参加することにしました。それがきっかけで今ではその団体（ちょうふチャリティーウォーク）の実行委員長を務めています。

強い目的意識をもって始めたというよりも、ある関心より、一歩踏み出した後、そこで出会った人々に導かれるようにボランティア活動に携わることになっていることが共通点としてみられました。

2. ボランティアを継続している理由には多くの共通点



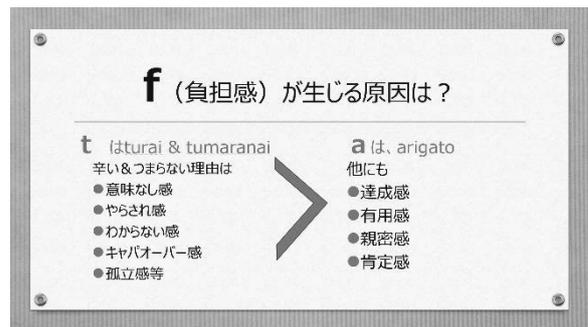
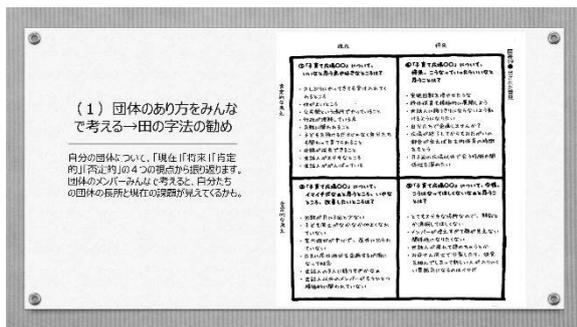
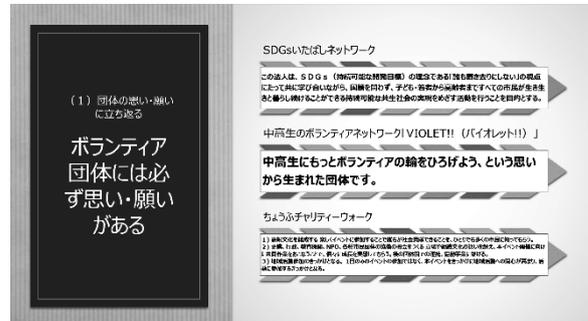
ボランティア活動開始後は、多くの共通点がありました。活動が社会貢献となっている以上に、活動を通じた ①出会い、②学び、③成長 の3点が継続の源になっています。

ボランティアでは、同じ関心をもった多世代の人たちが集まり、皆がフラットな関係で取り組むことができる環境であることも継続の理由に挙げられます。

3. 悩んだ先に本当の自分らしいボランティアの形が見えてくる

川田先生の講義では、前述のパネリストの話をも踏まえつつ、ボランティアを開始・継続する理由を体系的に説明いただきました。その中で、継続していく中での課題や悩み、その対処方法についてのお話もありました。共通した課題・悩みとして、「本当に役に立っているのか」「認められたい」「時間がない」「ボランティアに頑張りすぎて家のことが疎かになる」などが挙げられるなか、「悩んでいる時に限らず、どんな活動も必ず思い・願いがあって始まっているので、そこに立ち返ることで見えてくるものがある」、「場合によっては、ボランティア活動への参加を止めてしまっても構わない」など説明がありました。具体的な手法として、「現在」「将来」「肯定的」「否定的」の4つ視点を振り返る「田の字法」や、「負担感の研究」の紹介がありました。

「ボランティア活動を通して悩むことは特別なことではない。むしろ、悩んだ先に本当の自分らしいボランティアの形が見えてくる」という前向きな考えが、参加者から多くの共感を得ることができました。



4. 「ボランティア = 本能」

会場の参加者からの質問で、「ボランティアを日本語で言うと何でしょうか?」の質問に対し、水田から「『サードプレイス(居場所)』。人生を豊かにしてくれる大切な場所や時間」、小汲さんからは「本能」という回答がありました。本分科会を通して、改めてボランティアが個々へ及ぼす多大な影響を再認識できる時間となりました。

参加者の声(アンケート結果などから)

- ・ボランティアについて、うまく言語化できていない自分の思いが整理されていきました。ありがとうございました。
- ・ボランティアについて理想論だけでなく、実践的、現実的な観点での話もあってとても勉強になりました。
- ・ボランティアへの考え方を学ぶことにより、一層今後の活動に力が入りました。

企画・運営

- 水田 征吾 (ちょうふチャリティーウォーク実行委員会) 【主担当・報告書】
 稲葉 圭亮 (ボランティア活動センターこくぶんじ) 【副担当】
 押山 愛紀子 (東京 YMCA liby) 【副担当】

No.11 ボランティアのインセンティブって何だ?!

矛盾する二つの言葉「有償・無償ボランティア」を考える

開催目的

無償性はボランティアの基本の基であるはずなのに有償ボランティアを発展させるべきという意見もあります。

学校におけるボランティア活動のカリキュラム化や課題評価、就活での有利性やCSRなど企業への義務化、オリパラのようにボランティアありきの事業など、ボランティア活動に対するインセンティブ（動機付け）のあり方を考えてみたいと思います。

開催日時

2月11日(土) 16:30~18:30

参加者数

41名(参加者32名:うちオンライン20名 会場12名、出演者3名、スタッフ5名、ボランティア1名)

出演者

ファシリテーター: 枝見 太郎 (実行委員・一般財団法人富士福祉事業団)
ディベーター: 上田 英司 (実行委員・特定非営利活動法人日本NPOセンター)
ディベーター: 高橋 義博 (実行委員・府中市市民活動センター プラッツ-/Tripod)

内容・成果・課題

<内容>

今回のプログラムは以下の通り

1. 有償ボランティアの現状

「ボランティア」という言葉は一般的に活用されていると思いますが、無償性などの原則が曖昧なまま、一人歩きしている結果となっています。例えば「有償ボランティア」でインターネットを検索すると様々な案件が出てきます。残念ながら、社会福祉協議会が積極的に募集する有償ボランティアも少なくありません。用語解説なども含めれば数多なサイトがヒットする現状で、「有償ボランティア」という言葉はすでに市民権を得てしまっているといっても過言ではないでしょう。一方で、有償ボランティアと一言でいっても、個別にみると、その理解は一定していないようにも思います。例えば交通費などの実費弁償を有償と呼んでいる場合もあるようです。また、実際には「アルバイト」のように仕事をしてもらっているのに「有償ボランティア」に対する対価は謝礼であり、給与ではないなどの矛盾した位置づけであったりします。様々な問題や整理も行われないうまま、言葉の氾濫が起きているようにも思います。



2. シミュレーションディベートおよび、参加者グループの話し合いの実施

本来のボランティアを推進するディベーター(上田)、有償を推進するディベーター(高橋)、解説をしながらのファシリテーター(枝見)の3名で役割を担いディベートを実施しました。

地域の有償福祉サービスのコーディネーターとしての認識をテーマにディベートし、あえて考え方の対立軸を明確にし、お互いの立ち位置から見る意見を出し合うことによって、この分



科会の参加者に客観的な意見を改めて考えていただく目的で実施しました。
分科会参加者のグループの話し合いの中では、以下箇条書きの様な意見が寄せられました。

(一部掲載)

- 有償活動か否かは様々なケースに対応できるような柔軟なプラン作りが必要なのではないか。
- ボランティアに携わるときの自身の気持ちを振り返り、共有することでボランティアの意味を考えるきっかけとなった。
- 長年ボランティアに携わっていたが、「有償」の言葉自体に疑問を持ってきた。この先はどうなってしまうのか不安でした。
- 仕事とボランティアの境目は何なのだろうか。
- 有償ボランティアの言葉を使う際にコーディネーターは、ボランティア、受益者双方の立場をよく見てプログラムを組む必要がある。
- 行政がこの流れを推進しているような節があるのはいかがなものか。
- ボランティアは高尚だと思われる。ただ有償活動というだけではなくボランティアをつけるから人が集まるということもあるのではないのでしょうか。



<成果および課題>

有償ボランティアと称して、例えば在宅福祉サービスの的な内容なども対応しなくてはならない。この社会状況そのものに目を向ける必要があることが再確認できたと思います。

また、今回はシミュレーションでしたが議論が活発に行われることで活動の意味を考えることが大切であり、健全であることがわかりました。本分科会では有償活動そのものを否定するのではなく、有償で行われるからこそ守られる継続性やサービスの質の担保などが社会にとって有益であることを理解した上で、本質的なボランティア活動との関係性を考えることができたのではないかと考えます。有償有り無しではなく社会的意義が社会参加へのインセンティブとなるようなコーディネーションが必要であることへの気づきもありました。

最後に、この分科会を通して、コーディネートする側の適切なボランティアの理解や倫理的な意味において「その有償活動はなぜ“ボランティア”を冠する必要があるのか」を今一度考える必要がある程度伝わったのではないかと、アンケート結果をみて感じています。以後「有償ボランティア」という言葉の理解については参加された方々の今後の取り組みに託したいと思います。

参加者の声（アンケート結果などから）

- 有償ボランティアを事業として担当しているため、正直「有償ボランティア」という言葉を使うことに抵抗がありませんでした。「有償ボランティア」という言葉を使うことにより、ボランティアの本質を見失う可能性があることを知ることができました。
- 有償無償に関わらず、ボランティアの捉え方についてその都度考え直すことが大事だなと感じました。中間支援組織としては、有償無償含め、ボランティアという言葉を使う際には意味を持って使うべきだと改めて感じました。

企画・運営

枝見 太朗（一般財団法人富士福祉事業団）【主担当】

高野 まゆみ（一般社団法人江戸小断つながりコーチング）【副担当】

高橋 義博（府中市市民活動センター プラッツ / Tripod）【報告書】

No.12 ボランティアの中心・飯田橋でモヤモヤを叫ぶ ～施設の中はどうなってますか？ボランティアさんどうしてしてますか？～

開催目的

新型コロナ感染症流行から4年。重症化しやすい高齢者・障害者の施設・事業所では外部からの出入りだけでなく、地域行事への参加や交流なども止めざるを得ませんでした。

閉塞的な状況が続く中で、再度地域との関わりを形成するためにはどうしたらよいでしょうか？

高齢者・障害者の事業所や、地域ボランティアなどそれぞれの視点から、これからのこと・再び結びつくためにできることやアイデアなどを楽しく語らいながら共有したいと思います。

開催日時

2月11日(土) 16:30~18:30

参加者数

23名(参加者13名:うちオンライン5名 会場8名、出演者2名、スタッフ6名、ボランティア2名)

出演者

- ・今 裕司さん(社会福祉法人秋川あすなろ会 あすなろみんなの家 施設長・秋川あすなろ保育園 園長)
- ・佐々木 仁美さん(特定非営利活動法人つどい 玉堤つどいの家 施設長)

内容・成果・課題

1. 登壇者報告

(1) 今 裕司さん(あすなろみんなの家 施設長・秋川あすなろ保育園 園長)

コロナにより、ボランティアの受け入れや地域活動、法人の特色でもある世代間交流など全てを止めてしまいました。状況も変わり、一部再開させたこともありますが、やはり高齢者施設として元に戻すことが難しい部分もあります。

社会の動きと高齢分野では隔たりや考え方の分断が起きている現状があり、合意形成の難しさを感じます。また、職員は以前を知らない人がいるなどもあり、必ずしも以前と同じにすることが正しいとも限らないと考えます。それぞれの立場から工夫をし、一歩ずつ積み重ねる事が重要です。

(2) 佐々木 仁美さん(玉堤つどいの家 施設長)

障害者通所施設でも外部の受け入れを制限してきました。ただ、特定のボランティアについて、ワクチン接種や地域の感染状況に応じて再開をしたり、中止をするなど臨機応変に対応してきました。しかし、それ以外の学生との交流や宿泊行事などは現在も再開できていません。

ボランティアさんとの繋がりを保つために、施設側から手紙を送ったりSNSの更新をこまめにするなど工夫を続けてきました。

今後withコロナに移行していくにあたり、どこからどのように緩和していったら良いのか悩んでいます。少人数の活動や短時間、野外活動など感染リスクの低いところから始めるといったことを考えています。

(3) 上岡 夏海(白十字ホーム 生活相談員)

コロナ流行後、ボランティアさんや家族の皆さんには行事の飾りづくりなど、入館せずに協力してもらっています。ですが、利用者との関わりを望まれる方も多く、活動内容に限界を感じています。オンラインでの活動もしていますが、高齢者の特性として音声の聞き取りにくさや認知症の進行による理解の難しさもあり、これまでのように活動を楽しむことができていません。

利用者の命を守ることに楽しみをつくるのが相反していて、どう動きだしたら良いか頭を悩ませています。

2. グループワーク

(1) グループメンバー個々のモヤモヤやアイデアの抽出

(2) 情報共有

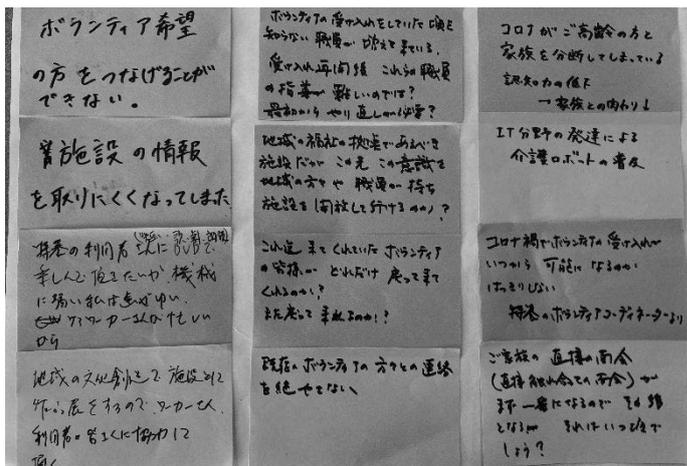


① 参加者が抱える「モヤモヤ」

- ・施設の情報が見えにくくなってしまった。ボランティアにどこまで介入してもらいたいのかが発信してほしい。
- ・いつ、どのように受け入れを再開して良いのか明確な基準がない。ボランティアの感染有無が分からず不安。
- ・ボランティアと受け入れ側をつなげられない（需要と供給のバランスが悪い）。
- ・機械に弱く、楽しんでもらえるようなDVDの用意ができない。また、オンライン形式は職員の負担になっている部分もある。
- ・ボランティアの世代間のギャップがあり、ノウハウを引き継げない。
- ・ボランティアを受け入れていた頃を知らない職員が増えている。再開後の指導が難しい。
- ・これまでのボランティアが戻ってきてくれるか？
- ・人とのつながりを求めて、事業所への電話が増えていて業務過多になっている。
- ・施設の従来の価値観が受け入れられるか？
- ・感染対策と受け入れ方のバランスをどうとるか？
- ・新たな手段を伝え、実行してもらうことは負担につながるのではないか？

② 参加者からのアイデア

- ・定員を設けてイベント企画をしている。
- ・電話での傾聴ボランティア。
- ・オンラインで、園児の歌やフラダンス交流会
- ・施設の職員が学校に出向き、ロールプレイや講義をする。
- ・コロナをきっかけに、施設のデジタル機器をバージョンアップしました。
- ・IT、ICTの活用。それらを使う職員のスキルアップも必要。
- ・既存のボランティアとの連絡を絶やさないようにしている。
- ・地域イベントでの物販などで、地域に出向くことは可能ではないか？
- ・ホスピタルアートや自宅で行えるボランティア活動の提供。
- ・お給料を出すサービスがあるらしい。お金を稼ぐ楽しさで活力アップ。
- ・先行事例や他施設の状況の共有。
- ・地域の文化創造で、施設として作品展をするので、利用者さんやワーカーに協力してもらう。



3. 振り返り・課題・今後の展望

緩和に向け、様々な立場の人がお互いの課題や取り組みを共通認識として持つことができる機会となりました。動き出すことが難しい分野であるからこそ、対話をすることでそれぞれの立場の相互理解・活動の推進を図っていく必要があると感じます。

参加者の声（アンケート結果などから）

- ・いろいろな立場の方のお話やモヤモヤ・実践例など聞かせていただき、いろいろな気づきがありました。ボランティア活動の立場として、お手伝いの思いが現場の皆様に新たな業務増を強いてしまわぬ様に、出来ることで出来る時に、の思いです。
- ・施設管理者の方、職員の方、社協の方、学生の方、各々の立場で見える景色や施設状況からの視点、色々な気づきがありました。施設の特性によるコロナ禍での問題点や対応法、実践例等々、現場からの発信と情報の共有の必要性、IT化の推進と現場のギャップ、直接処遇業務とリモートワーク推進のギャップ等、今後のボランティア活動にアップデートとなる大変良い経験をさせていただきました。

企画・運営

上岡 夏海（特別養護老人ホーム白十字ホーム 生活相談員）【主担当・報告書】

阿南 有紀（社会福祉法人渋谷区社会福祉協議会 しぶやボランティアセンター）【副担当】

太田 学（東京ボランティア・市民活動センター）【副担当】

No.13 「社会の現状から働く場のダイバーシティを考えよう！」～ガチャガチャ de ダイバーシティ体験会～

開催目的

近年、様々な場面でダイバーシティ（多様性）という言葉を目にします。ダイバーシティという言葉の理解、社会と職場でのダイバーシティの現状を体感する場として分科会を開催。分科会では、社会のダイバーシティを講師の方から学び、働く場のダイバーシティをガチャガチャでランダムに選択された立場で体験的に考えるワークショップから学ぶ場として開催いたしました。

開催日時

2月11日（土）16：30～18：30

参加者数

21名（参加者12名、出演者1名、スタッフ6名、ボランティア2名）

出演者

渡辺 萌絵さん（えんがわ家族代表）

高山 功平（実行委員・株式会社ネオキャリア社長室サステナブル推進）

内容・成果・課題

1. 社会のダイバーシティについての講義 ▶講師：えんがわ家族渡辺代表

（1）多様な人々との協働による地域コミュニティ活動の事例紹介



新宿区戸山地区は、都内の真ん中でありながら、高齢化率がおよそ50%以上の地域です。講師の渡辺さんは、人々のつながりの必要性を感じ、「えんがわ家族」で地域食堂などを開催しています。活動をしていくなかで、「単発イベントではなく、継続的なつながりの場の必要性」という課題に直面しました。新宿区中央図書館の遊休地（廃校になった中学校の旧校庭）を使って、「そらとだいちの図書館」をはじめました。

（2）ダイバーシティとは

ダイバーシティ（多様性）には、性別や年齢、国籍など表面的に認識できるものもあれば、働き方、価値観、家族の状況など、外部からは認識しにくく、時間の経過とともに変化しやすいものもあります。働く場でも、地域コミュニティでも、多様性の理解だけでなく、相互に理解、尊重・機能している「インクルージョン（包括）」を目指したいのは同じはずですが、しかし現実には簡単ではありません。

（3）多様性を生かした組織づくり、地域コミュニティづくりとは

「そらとだいちの図書館」を例に、ダイバーシティ&インクルージョンを考えてみます。

そらとだいちの図書館では、小学生から80代のシニアまで、子育て中のママや、外国籍の方もいます。多年齢のメンバーが集まり、一人ひとりの個性を生かし合い、新たな価値を創造しています。例えば、足が悪く、体力仕事は苦手なシニアにも、長年の経験で培ったスキルや知恵、時間的な余裕があり、広場の見守りや子どもたちへの声掛けが得意という強みがあります。

子育て中のママは、活動時間に制限があるものの、子ども向けイベントの企画が得意です。若手の会社員は、月に1回程度と参加が難しいものの、仕事で慣れている仕組み作りやパソコン作業ができます。

それぞれ強みを発揮していくことで、野菜作りの活動が、つながりづくりになっていきます。

しかし、初めからうまくいっていたわけではありません。メンバーお互いの「暗黙の了解」や「当たり前」のズレによってモヤモヤや不満が発生したこともあります。そこで、そらとだいちの図書館のビジョン「みんなの居場所と出番がある」について、例えば「みんなって誰？」「居場所ってどんなイメ

ージ?」といった話し合いを通し、暗黙の前提には違いがあることを認識しました。対話の重要性を感じ、対話は違いをきっかけとしたコミュニケーションの活性化につながりました。

2. ダイバーシティ体験ワークショップ →ファシリテーター：株式会社ネオキャリア高山



(1) 個人ワーク

自作のガチャガチャを使って、楽しみながらワークを進めます。ガチャガチャで引いたカプセルを開けて、中に書かれている働き手の立場を想像し、その方が活躍するには、どんな働き方や職場を必要としているかを考えました。ガチャガチャの中身は、「あなたは外国籍の30代男性です。家族構成：ネパール出身3人家族 背景：国際結婚をして日本に

10年住んでいる。前職では学校の英語の先生や塾講師をしていたが、より高い収入を求めて今の仕事に2か月前に転職。職場には慣れていない」といった細かい設定が書かれています。グループで考えを共有し、次は、自分自身についてどんな働き方や職場が必要か考え、再度グループで共有となります。

(2) グループワーク



ガチャガチャで引いた設定の働き手と、自分自身を職場のメンバーに見立てて、職場（グループ）の最適な働き方を考えます。発表の時間では、働く時間や働く場所の多様性、生活環境にあった働き方、お互いを理解するた

めのイベントを考える。カバーしあえる環境を作るため、お互いを理解する対話ルームの必要性があるとよい、など、様々なダイバーシティ&インクルージョンのアイデアが出ました。

3. 成果と課題

ダイバーシティについて社会と職場という異なる視点から参加者のみなさんに考えていただきました。ワークを通して、対話の重要性を理解していただけたのではないのでしょうか。職場など、それぞれの活動先に持ち帰っていただけると嬉しいです。

地域でも、職場でも、まだまだ多様なセクターや多年齢で対話をする機会が少ないということが分かりました。対話の場がもっとダイバーシティ&インクルージョンを達成するために重要だと感じます。

参加者の声（アンケート結果などから）

- ・ワークショップでの多様な意見が大変参考になりました。自分と人生の異なる人間のガチャを引いたのも、世の中を考える良いきっかけになりました。
- ・社会の現状や今後、普段なかなか知ることのできないことを知ることができてよかったです。
- ・異なる職場、ましてや全く違う立場の方と、こうやって働き方について話し合う場は発見が多く、そして楽しかったです！渡辺さんのご活動も大変興味深いものでした。

(11名回答中11名すべてが「満足」)

企画・運営

高山 功平（株式会社ネオキャリア）【主担当・報告書】

榎本 朝美（東京ボランティア・市民活動センター）【副担当】

稲葉 圭亮（国分寺市社会福祉協議会 ボランティア活動センターこくぶんじ）【副担当】

No.14 会場&オンライン交流会「スマイル☺」

開催目的

分科会の時間だけでは話さきれない！！もっと参加者同士で話したい！！そんな参加者の皆さんや出演者、実行委員などが、オンライン&オフラインで自由に語り合える場として企画しました。

開催日時

2月11日（土）19：00～20：00

参加者数

57名（参加者25名：うちオンライン8名 会場17名、スタッフ25名、ボランティア7名）

内容・成果・課題

会場&オンライン交流会「スマイル☺」は、会場参加者とオンライン参加者が一緒に交流するといったハイブリッド形式での交流会です。

最初に、会場参加者やオンライン参加者が一同に双方向のコミュニケーションが取れるようにアイスブレイクを行いました。「〇〇分の1を目指そう！」と称して、会場やオンラインでの参加者57人中で1人が当てはまる質問を出すゲームを行いました。「大谷翔平さんを生で見たことある人？」、「海外で生まれた人？」、「47都道府県に行ったことある人？」、「海外20ヶ国以上行ったことある人？」といった質問が出ました。

次に、会場参加者は会場参加者同士で、オンライン参加者はオンライン参加者同士で、グループに分かれて交流を行いました。オンライン参加者は、Zoomのブレイクアウトルームを利用して、参加者はランダムでグループに分けています。「最近のスマイル☺」、「参加分科会の感想や期待」の2つのテーマで交流を深めました。

ボランティアフォーラムでは、交流を大切にしており、昨年に引き続きオンラインを活用した交流会にチャレンジ。昨年は完全オンラインでの実施だったため、今年は会場参加者の参加人数が大幅に増えた一方で、オンライン参加者が少なくなりましたが、充実した交流の場になりました。

今後も、ニーズや時代に合った交流の方法を模索していきたいと考えています。





企画・運営

- 鹿住 貴之（認定NPO法人JUON NETWORK）
- 犬塚 尚樹（NPO法人ふれあいの家 おばちゃんち）【報告書】
- 村尾 憲治（多文化共生プロジェクト）
- 上岡 夏海（白十字ホーム）
- 榎本 朝美（東京ボランティア・市民活動センター）

No.15 防災意識を高めよう！！ ～ほっとする食の確保と地域での支え合い～

開催目的

災害時には、避難所等に食べ物が届くまで数日～1週間程、規模によってはそれ以上の時間がかかることもあり、食の確保は誰もが必要となる為、備蓄食料の不足が想定されます。また、被災後の生活を送るにあたり、「栄養バランス」、「乳幼児」、「高齢者」、「アレルギーがある方」等に対して、急性期に対応できる備えも必要になります。このような課題に皆で向き合い、新たな気づきを得ると共に、「平時から出来ること」について考え、防災意識や問題意識を高め、各々の地域での活動に繋げていくことを目的に開催しました。

開催日時

2月12日(日) 10:00～12:00

参加者数

42名(参加者29名：うちオンライン16名 会場13名、出演者4名、ボランティア5名、スタッフ4名)

出演者

齋藤 由里子さん(公益財団法人味の素ファンデーション(TAF) 被災地復興応援事業担当マネージャー)

斉藤 由紀子さん(公益社団法人東京都栄養士会副会長 JDA-DAT(災害支援チーム)リーダー)

緑川 琴江さん(いわき市アレルギーっ子交流会『もぐのび』 代表)

加納 佑一さん(東京ボランティア・市民活動センター 災害担当) <ファシリテーター>

内容・成果・課題

1. 登壇者のお話

(1) 味の素ファンデーションの齋藤さんより「いざという時どうする?～あなたの食と栄養～」について

災害時の食べることの意義についてのお話を始め、菓子パンやおにぎり、揚げ物中心のお弁当等が何か月も続くという問題、東日本大震災を経験していても日本の家庭での食料備蓄が足りないという状態が続いていること等、問題提起をいただきました。災害時の取り組みの事例としては、イタリアやトルコでは、キッチンカーを利用し官民連携で迅速に温かい食事支援が行われていること、新潟の中越地震、中越沖地震の際には、被災した事業者がお弁当を提供することで自分たちの経済復興も早まった「弁当プロジェクト」の事例があるとのことでした。また、西日本豪雨で被災した愛媛県宇和島市では、行政の依頼を受けPTA会長が調整を行い、民間の食事支援が活かされていたという事例もあり、ご紹介いただきました。

食は、一人ひとりの努力と連携で状況を変え問題を解決することができる数少ない減災、健康被害予防手段になること、災害の対応は、いつも生活の延長線上にあること、また、フェーズフリーの考え方について等、食と栄養に対する課題や取り組み等について総合的に、お話しいただきました。

(2) 東京都栄養士会の斉藤さんより「災害時の栄養と食生活」について

各地域における栄養士の所属場所や、災害発生時のJDA-DATの支援についてご説明があり、その中で、被災地でも安心して栄養相談ができるスペースを確保することを目的としたエディケーションカーや、東京栄養サミットでの、高密度ポリエチレン袋を利用したパッククッキングという調理方法についてご紹介いただきました。また、東京都栄養士会では、災害時にスムーズに支援に入れるよう、東京都等と「災害時における栄養・食生活支援活動に関する協定書」を結んでおり、平常時、防災訓練等に加わり、顔が見える関係を作っているとのことでした。加えて、発災時の支援として、特殊栄養食品ステーションがあること、災害発生時の栄養・食生活支援活動を行うためのツールである「災害時の栄養・食生活支援ガイド」について、離乳食のポイント、介護用の食を踏まえ、ご説明がありました。

地域の備蓄状況の確認や、共助という観点から災害対策について地域で相談していくことの大切さ等と共に、栄養士の役割、災害時の対応、平時の取り組み等について、お話しいただきました。

(3) もぐのびの緑川さんより「ほっとする「食」の支え ～非常時のアレルギー～」について

アレルギーについてのご説明から始まり、災害時の情報の偏りや、炊き出しがあっても、アレルギーの配慮がされているかわからない状況の中で行くことが出来ない等、実際の被災者の体験談を含め、問題提起をいただきました。



日頃から顔の見える関係として、「いたばしアレルギーの会」と一緒に立ち上げた「患者会防災ネットワーク」について、ご紹介がありました。お互いに共同備蓄を持ち合っていた為、水害の時にすぐに仲間に渡すことができたこと、また、コロナ禍で関東圏内のマスクが足りない時には、関係団体の皆さんにお送りすることができたこと等お話しいただきました。また、「もぐのび」の実践例として、障害関係や医療関係の方との防災訓練や、行政と課題を共有しながらアレルギー講座を行ったことについてもご紹介がありました。

アレルギーに配慮した食べ物をご用意いただける場合、原材料等が明確にわかると嬉しいと思うこと、アレルギーに配慮されていることを周知する方法を、皆さんと一緒に考えられると有難いこと等、アレルギーについての理解や課題、ネットワークの取り組み等について、お話しいただきました。

2. 意見交換

都内活動団体より、話題提供、活動紹介をいただきました。葛飾区で活動している団体は、コミュニティ形成を通じて地域の防災力を高める活動をしており、活動を繋げる、周りと繋がっていく、そしてフェーズフリーの活動に重きを置いているとのことでした。板橋区で産後の子育て支援をしている団体からは、防災のプロジェクトとして、中小企業がベビーフードを備蓄する仕組みである、子育て応援緊急備蓄「まちもり」プロジェクトについてご紹介いただきました。

3. 参加者同士で意見交換

「平時から出来る食に対する備え」について、共助という視点で意見交換を行いました。

参加者からの意見をご紹介します。

- ・日頃から繋がりをもっていくことが非常に大事、平常時から情報の共有化
- ・市民の方々を巻き込むために、ボランティアセンターや市民活動センターが繋がる役割をする
- ・防災というトピックだけでは難しいので、例えば、地域イベントや医療サービス等を織り交ぜながら、継続的にコミュニケーションを取っていくことが非常に大事 など

4. 成果と課題

災害時の食に対する課題の認識を強く持つことができ、いざという時の為に、平時からの繋がりが大事になることは、事例等を通し、改めて実感できたと思います。備蓄食料やアレルギーを含む食に対する課題をどのように広めていくのか、また、平時から地域の繋がりを意識すると共に、顔の見える関係を強化していくことも求められると思います。自助、共助、公助を意識し、一人ひとりが、日頃から災害に備えておくことが重要であると思います。

参加者の声（アンケート結果などから）

- ・食物アレルギーに関して以外にも配慮されている現実を知りました。
- ・今後は当事者がアレルギー配慮を要していると発言できるよう努めていきたいです。
- ・食に関しては専門外であって、今まで全く気にしたことはなかったのですが、対象者にとってはそれがとても大きな問題になるのでみんなで考えて広めていかなくてはいけないのだと感じました。

企画・運営

稲葉 圭亮（国分寺市社会福祉協議会 ボランティア活動センターこくぶんじ）【主担当・報告書】

神元 幸津江（認定NPO 法人全国災害ボランティア支援団体ネットワーク）【副担当】

水田 征吾（ちょうふチャリティーウォーク）【副担当】

押山 愛紀子（公益財団法人東京YMCA l i b y）【副担当】

No.16 記録と記憶から振り返る関東大震災 ～市民による救援活動の源流を訪ねる～

開催目的

1923（大正12）年9月1日に発生した関東大震災から今年で100年を迎えます。地震や火災などにより、首都圏に甚大な被害をもたらしたこの災害では、救援や復興に多くの市民が活躍しました。これらの動きは、今日の民間福祉やボランティア・市民活動につながる源流の一つでもあります。

この分科会では、講話とフィールドワークを通して、関東大震災の史実とそれを裏付ける記録から当時の様子を辿るとともに、地域で積み重ねてきた実践とその記憶を合わせることで、災害と市民による救援活動や地域づくりを考えました。

開催日時

2月12日（日）10:00～15:00

参加者数

32名（参加者20名、出演者4名、スタッフ7名、ボランティア1名）

出演者

講師：野原 健治さん（社会福祉法人興望館 理事長）

服部 榮さん（一般財団法人本所賀川記念館 理事長）

フィールドワークナビゲーター：坂井 新二さん（元公益財団法人東京都人権啓発センター 専門員）

進行：藤原 孝公さん（学習院大学大学院アーカイブズ学専攻博士後期課程）

内容・成果・課題

<午前の部：興望館を会場に鼎談>

1. 話題提供 記録と記憶から振り返る関東大震災

初めに、鼎談への導入及び企画趣旨として、進行役の藤原さんより話題提供をいただきました。

（1）遠隔地に建てられた関東大震災慰霊碑の紹介

（2）「大震災善後会報告書」にみる本所基督教青年会と興望館

民間有志による罹災者救済及び経済復興を目的とした組織である「大震災善後会」（座長：渋沢栄一）が発行した報告書「大震災善後会報告書」を紹介するとともに、「本所基督教青年会」と興望館の前身である「東京基督教婦人矯風会外人部」が大震災善後会等の支援を受けて被災者支援活動に取り組んでいたことが当時の記録からも裏付けられることの説明がありました。

2. 鼎談

（1）関東大震災救援活動における賀川豊彦と本所基督教産業青年会の働き、その後の展開について（服部 榮さん）

震災時、神戸にいた賀川豊彦は、3日後には横浜に上陸。被災地を見て歩いた後、再び神戸で救援物資、義援金を集めて上京し、本所基督教産業青年会を立ち上げ、セツルメント活動を展開しました。その活動を引き継ぎ、本所賀川記念館が設立されて現在に至っています。賀川の活動の柱には「良き隣人として、隣人の眼となり、隣人の重荷を負わせて頂く」「弱くされた者」に仕えるというキリスト教の精神がありますが、いつまでも自分たちが支援を行うのではなく、ニーズを調査し、住民を組織化し、地域住民自身が自分たちの生活を支えるという協同組合の思想と実践が柱となっていたとのこと。これは、今日の災害支援の基本的な考え方にも全く通じるものだと感じました。地域活動に移ってからは、賀川は引き上げようとしていたところ、青年たちが声を挙げて活動を継続したという話もボランティアリズムを感じる印象的なエピソードでした。

（2）興望館の福祉活動にキリスト教の精神・セツルメントの考え方がどのように反映されているか（野原 健治さん）

1919（大正8）年に本所松倉町（現墨田区東駒形4丁目）に創立した興望館。当時は、農村から都市へ職を求めて人々が流入してきた時期であり、東京下町の母子の生活の惨状を知った、北米やカナダ



の宣教師たちが幼稚園を立ち上げたのが始まりです。本格的に事業を展開するために、借金をして近代的設備の整った建物を建て、開館の竣工式を行うまさにその日、関東大震災が発生して焼失。宣教師や青年たち、さまざまな宗教団体が協力し、バラックを建てて、救援活動を行いました。その後、向島寺島町（現墨田区京島1丁目）へ移転し、児童福祉を最優先としてセツルメント活動を展開してきました。

キリスト教的な考え方の中心でもある対象者への深い敬意、命の大切さを守りサービスの質へのこだわりや一人ひとりへの個別対応、出会いの創出や生活文化のレベル向上などを大正時代からすでに目標に掲げ取り組んでいました。20世紀初頭にイギリスを発祥として世界で注目されていたセツルメント運動のための拠点として多難を乗り越えて興望館が設立され、大震災や東京大空襲などで被災した多くの人々の支援を行ってきたのでした。

<午後の部：フィールドワーク>

午後は、浅草へ移動し、関東大震災に関連する史跡を巡りました。ナビゲーターの坂井さんより、ポイントごとに解説をしていただきました。

【ルート】言問橋→吉野橋・山谷堀公園→吉原大門（見返り柳）→吉原弁天→浄閑寺（希望者のみ）

山谷堀公園では、江戸時代に差別された身分の人たちが暮らしていた地域があったこと、今は暗渠になっているが、かつては吉原へと続くお堀があり、船が通っていたことなどが語られました。吉原大門（見返り柳）から吉原弁天へと続く道では、当時は高い堀と「お歯黒どぶ」という深い堀に囲まれていて、その高さの違いや、登楼の様子を外から見られないように大きく道が蛇行しているなど、今もその名残を感じることができました。吉原弁天では、関東大震災時に、猛火を逃れようとした女郎たちが熱さのあまり弁天池に身を投げ、650人とも言われる多くの人々が溺死したという話をお聞きしました。逃げられないように、外から見えないように作られたこの町ゆえの悲劇と、おそらく名前も残らないであろう人たちのことを考えると、いつの時代も災害時には弱い立場の人が苦しい状況に置かれることを強く感じるすることができました。最後に、そこで亡くなった人々の遺骨が納められている浄閑寺を訪れました。

今回、関東大震災という悲劇に見舞われながらも、キリスト教の精神やセツルメントの実践を通して、住民自身が復興活動をして立ち上がっていくことを支えた2つの組織の取り組みをお聞きしました。その取り組みが現在の福祉活動にもつながっていることを知り、ボランティアの価値を改めて感じるすることができました。

一方で、そのような希望を感じるお話とは対比的に、厳しい環境にあった弱い立場の人々の悲劇をフィールドワークで感じることで、これから発生する災害時にも誰一人取り残さない支援を人権的な観点から考えていくことの重要性を感じるすることができました。

参加者の声（アンケート結果などから）

- ・ 当時、市民レベルでどのような活動があったのか、お二方のお話を、進行の方が時代背景等も補足しながら進められていてわかりやすく、「記録と記憶から振り返る」重要な機会でした。
- ・ 賀川豊彦氏の社会福祉活動の背景や裏側がお聴きでき、人柄を感じられるお話に引き込まれました。
- ・ どうして廓のまわりばかり歩いているのかと思いましたが、最後に、3,000人いた遊女がどぶや土手に囲まれたエリアに閉じ込められていて逃げられず、650人が亡くなったという話を聞き、納得できました。社会の中で最も弱い立場の人が災害時に犠牲になるということが実感できました。

企画・運営

足立 陽子（公益財団法人東京都人権啓発センター）【主担当・報告者】

市川 徹（株）世田谷社/一般財団法人世田谷コミュニティ財団）【副担当】

枝見 太郎（一般財団法人富士福祉事業団）【副担当】



No.17 東京の市民発電所を知ろう！ ～たまでん発電所見学会～

開催目的

近年、毎年のように大規模水害が起こり、気候変動の影響を実感するようになりました。国も「2050年カーボンニュートラル」の実現に向けた取り組みを進めていますが、地球温暖化の防止にあたっては、私達一人ひとりの行動も欠かすことはできません。

そこで、この分科会では、東京での取り組みとして昨年度、活動を紹介いただいた「多摩循環型エネルギー協会」の活動から生まれた市民発電所を見学し、私達ができることについて考えました。

開催日時

2月12日(日) 10:00～12:00

参加者数

11名(参加者4名、出演者4名、スタッフ3名)

出演者

桃井 和馬さん(一般社団法人多摩循環型エネルギー協会 代表理事/恵泉女学園大学 教授)
大木 貞嗣さん(一般社団法人多摩循環型エネルギー協会 理事/多摩電力合同会社 業務執行社員)
田中 功さん(一般社団法人多摩循環型エネルギー協会 理事/多摩電力合同会社 社員)
高森 郁哉さん(一般社団法人多摩循環型エネルギー協会 理事・事務局長)

内容・成果・課題

1. 市民発電所見学

集合場所の多摩センター駅から、バスで恵泉女学園大学入口まで移動し、多摩循環型エネルギー協会(多摩エネ協)の皆さんと合流。前半は、国土舘大学南野校舎(旧恵泉女学園大学南野校舎)の屋上に上がり、多摩電力合同会社(たまでん)が屋根を借り設置、操業している太陽光発電設備(ソーラーパネルと架台、パワーコンディショナーなど)を見学しました。

この施設は、多摩市循環型エネルギー協議会(団体名は当時)が環境省「地域主導型再生可能エネルギー事業化検討」事業に採択されたことがきっかけで、第1号の市民発電所として2013年にスタートしたものです。様々なステークホルダーによる再生可能エネルギー事業化検討協議会ができ、どうすれば継続的に地域の発電事業が成り立つかが検討されるなかで、並行して、多摩市、たまでん、多摩エネ協の三者基本協定を結び、公共施設の屋根をたまでんが賃借し、ソーラーパネルを設置して発電事業を行うことになりました。

ここでは、パネル1枚で250ワット、合計30キロワットが発電されています。始めるにあたって資金は、1000万円の私募債、つまり市民から資金を集め、残りは多摩信用金庫で借りました。パネル自体の寿命は30年程度と考えられていますが、返済は15年で終わり、固定価格買い取り制度で定められた20年間の計画で操業しているそうです。たまでん全体では、現在、市の9つの公共施設他、計13施設で、69万キロワットを発電しています。これは、一般家庭200軒分相当です。

たまでんは黒字とのことですが、理由は月給をもらって働いている人がいないからとのこと。しかしながら、運営には多くの市民が参加しています。発電状況の監視も常時市民が行っており、市民だからこそみんなのできる、との言葉が印象的でした。



2. レクチャー

後半は隣接する恵泉女学園大学の教室に移動してレクチャーをいただき、意見交換を行いました。

(1) 「SDGs が意味する本当のこと～紛争と地球環境と世界の未来～」 桃井和馬さん

桃井さんからは、多摩エネ協の活動の前提となるマクロな世界観についてお話しいただきました。元々報道写真家として、世界を回っていましたが、戦争や紛争がなぜ起きるのかが一番のテーマ。政治的な理念が使われても、根本にあるのは資源の奪い合いに他なりません。ウクライナも同様です。



IPCC（気候変動に関する政府間パネル）は10年後に平均気温が1.5度を超える可能性が高く、引き返し不可能な負の連鎖に襲われる Tipping Point が迫っていることを警告しています。今の生活を続けると、全世界を平均しても、地球は1.7個分が必要と言われています。しかし、実際には地球は1つしかなく、この足りない分について奪い合いが起きてしまうのです。

SDGs の本当の意味は、迫り来る Tipping Point を前に、人類は地球がひとつしかないことを理解すること、そのためには再生可能エネルギーが必要です。グローバルな視点で環境問題に取り組むことの大切さを語っていただきました。

(2) 「多摩エネ協の歩みと、地域脱炭素に向けて」 高森郁哉さん

高森さんからは、多摩エネ協についてお話しいただきました。多摩エネ協は、東日本大震災の福島原発事故をきっかけに設立された、エネルギーシフトをすすめる多摩の会が前身です。2012年5月に設立され、10月にはたまでんを発足させます。当初は、東京電力に全量売電していましたが、東村山市にある電気事業者のエネックスに全電気を買い取ってもらい、多摩地域に住んでいる方々に電力を供給するたまでんメニューを2019年から始めました。エネルギーの地産地消は、人材・資源・価値（電力）・お金が地域で好循環する仕組みができること、脱炭素社会に貢献できること、地域分散型でレジリエンスが向上することがメリットです。

今年度は、多摩市から採択された「たま気候みらいプロジェクト」を進め、調査や、事業者・若者世代に向けた啓発などを行ってきました。また、多摩市ニュータウン再生推進会議では、委員として脱炭素に向けた提案（電動アシスト自転車レンタル、ソーラーシェアリング農園など）をする予定です。

3. まとめ

最後の意見交換では、市民参加が話題となりました。市民の参加が重要な市民発電ですが、それが課題でもあります。温暖化対策は、我慢する、余裕のある人がやるなどマイナスのイメージが強いので、健康や豊かになる、一緒に地域の価値を高めるといようなイメージを打ち出して、多くの人に参加できるようにしたいとのことでした。また、福祉分野など比較的近い人達と連携することも大切です。

最後に桃井さんから、専制（独裁）vs 民主（市民参加）は、プランテーション vs 雑木林に似ている。雑木林は、効率は悪いが病気には強い。市民がやる意味はそこにあるとのことをお話をいただきました。

参加者の声（アンケート結果などから）

- ・エネルギー問題を、市民発電としてご努力されている姿に感銘しました。
- ・「市民発電所」ということについて知らないことが多く、学ぶことがたくさんありました。しかし、市民参加はなかなかむずかしいということもまた、考えさせられる課題だと思いました。

企画・運営

鹿住 貴之（認定 NPO 法人 JUON NETWORK）【主担当・報告書】

宮田 るり子（やさしい日本語ファシリテーター）【副担当】

No.18 もっと気軽にボランティア活動をしたい！ ～ボランティア活動の裾野を広げるためには～

開催目的

「ボランティア活動」という言葉自体を耳にすることは多いが、ボランティア活動を継続的に行っていくためのハードルが高いという声もあります。どこにも所属せずに気軽にふらっとボランティア活動ができる環境があると、活動団体と共にボランティア活動をもっと継続的にできるのではないかと考えています。本分科会では、ボランティア活動の参加者の幅を広げることやボランティア活動を継続的に参画してもらえよう工夫、仕掛けを活動団体から事例紹介を行っていただき、ボランティア活動の裾野を広げていくことを目的としました。

開催日時

2月12日(日) 13:30～15:30

参加者数

38名(参加者28名:うちオンライン17名 会場11名、出演者4名、スタッフ5名、ボランティア1名)

出演者

久保田 正雪さん(ボランティア団体どこでも足湯隊 代表)
長瀬 健太郎さん(特定非営利活動法人グッド)
谷村 一成さん(認定NPO法人グリーンバード高円寺チーム リーダー)
上田 英司さん(特定非営利活動法人日本NPOセンター)【進行役】

内容・成果・課題

1. 内容

(1) 谷村一成さんからの事例紹介

谷村さんからは、まず初めに認定NPO法人グリーンバード高円寺チームで活動を行っているゴミ拾いに関して、写真を用いてお話がありました。谷村さんは初めて参加する方々に、「一生懸命ゴミ拾いをしないでください」と声掛けを行っています。この言葉の本質としては、どんなに一生懸命ゴミ拾いを行っても、ゴミのポイ捨てをする人が減らない限りゴミは減らないため、一生懸命やればやるほどボランティア活動の域を超えてしまうためです。この活動では「①地域の中で「拾う側」が目立つ」、「②ゴミ拾いのイメージを変える」を通して、楽しそうに、目立つようにゴミ拾いをやっていくということを大切にしています。そして、気軽に参加できるように、手ぶらや飛び入れでの参加は可能とし、雨が降った場合はすぐに中止にするといった工夫のお話がありました。また、高円寺チームでは高校生、大学生の参加が多く、運営や仕切りを高校生、大学生に任せることも多いです。高校生、大学生が主体的にゴミ拾いの運営への参画や、企業へ企画提案を行い、ワークショップを展開している報告がありました。

(2) 久保田正雪さんからの事例紹介

久保田さんからは、まず初めにボランティア団体どこでも足湯隊の活動の原点や活動内容に関して、写真を用いてお話がありました。たらいにお湯を入れて被災者に足湯につかってもらい、そこで色々な悩みを傾聴するといった活動で、主な活動場所は東日本大震災の被災地で活動しています。足湯隊での工夫として、過去に参加していただいたボランティアへメールで活動の再開を発信し続け、活動が再開した際はSNSなどで活動内容を発信するといったことを行っていました。そして、足湯隊ツアー中にはオンとオフの切り替えを大事にして、日中の傾聴ボランティアを終えたあとに振り返りミーティングや交流会を積極的に行っています。失敗事例として、全国系列の新聞にボランティアの募集を行ったところ、格安で東北に行けるといったボランティア精神があまりない参加者が増え、

苦労した点もありました。最後に、久保田さんはボランティアを継続的に続ける本当の力として、「大好き」な気持ちがあるからこそボランティアを続けられるとお話がありました。

(3) 長瀬健太郎さんからの事例紹介

長瀬さんからは、まず初めに特定非営利活動法人グッドの活動であるボランティアワークキャンプ、フリースペース、共同生活寮の紹介があり、今回はボランティアワークキャンプに絞って、写真を用いてお話がありました。ボランティアワークキャンプでの工夫として、一人ぼっちにしないといったボランティア受け入れ（安心できる雰囲気づくり）を特に大切にしています。その手段として、ボランティア個人の状況把握ができるアンケートを事前提出、活動前後のフォロー（気持ちカードで見える化）、キャンプ中になぜ参加したかを参加者同士で共有する時間を設ける、キャンプ後も関係つなげていくためのフォローを行っています。グッドの活動でのリピーター率は74.1%と継続的な参加の結果につながっています。最後に、参加者同士の気持ちのよい人間関係を目指すことによって、お互いに心地よい、安心できる居場所でボランティアを続けられると述べられていました。

(4) グループワーク

出演者のお話を受けて、内容の理解を深めるために、グループワークの時間を設けました。グループワークのアウトプットを代表して2つ紹介します。「人の集め方、人と人のつなげ方、時間の使い方がそれぞれの団体で工夫があり、コーディネートする側の役割が大切だと感じました。」や「ボランティアは世間的なイメージだと偉いと思われそうですが、どんな気持ちであってもその活動が結果的に社会貢献に繋がれば気持ちが楽になります。もっと気軽にボランティア活動できると感じました。」というアウトプットがありました。

(5) 質疑応答

いくつか質問がありましたが、1つの質問を代表として紹介します。「参加者でボランティアを最初に行うきっかけはSNSなどでしょうか？」という質問に対して、「安心して参加できる環境があるからこそ、友達が友達を連れてきて、ボランティアを始めることが多いです。インターネットで「ボランティア」というキーワードで検索して参加するケースもあります。」というお話がありました。

2. 成果と課題

各活動団体からボランティアを継続的に続ける工夫や仕掛けの事例紹介を共有してもらうことで、ボランティアを受け入れる側はどんなことをすればよいのか、ボランティアする側はどんな意識で活動に取り組むといいのかといった新たな考えやヒントを得るきっかけになったと考えています。今後の課題は、活動内容によっては同じ工夫や仕掛けでも成功や失敗が起こり得るので、各活動団体のスタイルに合ったオリジナルの工夫や仕掛けに発展していくことだと考えています。



参加者の声（アンケート結果などから）

- ・新しく参加したい人が参加しやすいように各団体で何ができるか。この点について具体的な方法をタイプの違う3つの団体から聞いたのが良かったです。
- ・気軽に参加できる、振り返りの時間がある、一人ぼっちにさせない、という三団体それぞれの特徴はとても勉強になりました。

企画・運営

犬塚 尚樹（NPO 法人ふれあいの家 おばちゃんち）【主担当・報告書】

熊谷 紀良（東京ボランティア・市民活動センター）【副担当】

No.19 コロナに負けない！ 学生たちの取り組みから学ぶ、活動運営のコツ

開催目的

新型コロナ流行を受け、オンライン授業、サークル・課外活動の制限など、大学生を取り巻く環境は大きく変化しました。もちろん、ボランティアも。それでも、状況の変化に応じて柔軟に活動形式を変えた団体や、新しく団体を立ち上げた学生ボランティアがいます。これまでのカタチに囚われず、しなやかに活動する学生の皆さんから、ボランティア運営のコツを学ぼうと企画しました。当日は、各団体の学生スタッフも呼び、多くの学生のリアルな声を聞き、学び考える時間にしたいと思い、開催しました。

開催日時

2月12日（日）13:30～15:30

参加者数

16名（参加者6名：うちオンライン3名 会場3名、出演者4名、スタッフ5名、ボランティア1名）

出演者

- ・小松莉子さん（中央大学ボランティアセンター公認学生団体りこぼら！代表、中央大学3年）
- ・谷川貴乙さん（東日本きずなプロジェクト代表、都立大学3年）
- ・山口愛さん（東日本きずなプロジェクト副代表、都立大学3年）
- ・高橋希実さん（NPO 法人グッド、社会人）

内容・成果・課題

1. 内容

(1) コロナ禍でも良い活動をしていた団体の活動ポイントの紹介

- ① 東日本きずなプロジェクト（谷川貴乙さん・山口愛さん）
コロナ禍で従来行っていた東北での活動が制限され、新規メンバーが多い中でも、活動目的を明確化し、目的を達成するためにオンラインでの新たな取り組みに挑戦するなど、メンバーがモチベーション高く運営を続けられた経緯についてお話をいただきました。
- ② 中央大学ボランティアセンター公認学生団体りこぼら（小松莉子さん）
コロナ禍で活動制限がされる中、小松さんが1年生から3年生にかけて、どのように団体の中で活動していたかについてお話をいただきました。状況に合わせて活動内容は変化していくものの、活動制限が緩和された今年度は対面での会議運営にこだるなど一貫してコミュニケーションをとる機会を積極的につくっていたことが運営を続けられているコツだとおっしゃっていました。
- ③ NPO 法人グッド（高橋希実さん）
NPO 法人グッドが主催する大学生交流プログラム「きっかけ+仲間づくりキャンプ」に何度も参加していた理由について発表してくれました。スタッフや参加者の関わりによって「自己成長」できることが、参加を続ける理由だと具体例を交えてお話をいただきました。



(2) グループ内で質疑応答

学生と参加者を交えたグループワークを行いました。テーマは「学生に聞いてみたいこと」。参加者からは、「実際に学生はどんな支援を大人に求めるのか?」「支援する大人との距離感はどうぐらいがいいのか?」など、学生と支援する大人の関わり方についての質問や、「活動していて大変だったことは?」「どうして今の活動を始めようと思ったの?」など今の学生の心境についての質問が多くでした。また、学生同士が他団体の発表を聞いて、改めて活動の中で必要だと思ったことや団体に持ち帰りたい改善策など、学んだことについても話していました。



2. 成果

学生の取り組みから、日頃から活動目的に立ち返り何をすべきかを考えて行動すること、対面であって話す機会を大切にすること、次のステップがあるとメンバーは活動を頑張ることができそれが継続につながることに、という団体を運営するにあたり重要な視点を得ることができました。そして、学生のリアルな声を参加者が聞き、学生の力を理解したうえで今度どのように支援するかについて考える機会になりました。また、会場にきてくれたサポート学生の同士が、他団体の運営のコツを聞き、いい刺激をうけていました。参加する側、分科会を作る側、双方に学びのある時間となりました。

3. 課題

制限が緩和され、少しずつコロナ禍以前のように活動できる団体が増えてきました。ただ、活動が再開したらから良いということではありません。この2、3年でメンバーの入れ替わりがおき、以前の活動を知らない学生が多いです。ここからは、今まで築き上げてきた文化の再構築が必要となっていきます。だからこそ、支援者は今まで以上に学生がボランティア活動を通して何をもめているのかに耳を傾け、学生がどのような力をもっているのかを理解し、支援していくことが必要だと思います。

参加者の声（アンケート結果などから）

- ・団体のメンバーや他団体との関わりが今後とても重要になってくることに気付かされました。交流を今まで以上に大切にしていきたいです。
- ・自分の団体に所属しているメンバーのモチベーション維持を対面が再開されたこれからも大事にしていきたい、していかないといけないなと思いました。メンバー全員が団体に所属している意味をまだまだ見つけられていないなと思いました。
- ・団体活動の目的、目標をしっかりと共有して進めていくことが大切であるということを確認しました。

企画・運営

正田 理沙子（NPO 法人グッド）【主担当・報告書】

芦澤 弘子（聖学院大学ボランティアセンター）【副担当】

No.20 若者にとって生きやすい社会って??

開催目的

若者問題に「生きづらさ」という言葉が使われている昨今ですが、その背景として、居どころが見つからない、将来を描ききれない、社会とのつながりが薄れている、人間関係が上手くいかないなどがあります。では、生きやすい社会って何なのか？集まった参加者の視点を交えて話し合い、実際に子ども・若者と接しているゲストとともに、どんな未来を生きたいか考えていく機会を持ちたく、開催しました。

開催日時

2月12日（日）13:30～15:30

参加者数

18名（参加者8名、出演者3名、スタッフ5名、ボランティア2名）

出演者

平澤 和哉さん（NPO 法人ちょうふ子どもネット）
北村 真さん（NPO 法人ちょうふ子どもネット）
疋田 恵子さん（社会福祉法人 杉並区社会福祉協議会）〈ファシリテーター〉

内容・成果・課題

本分科会では、ファシリテーターの進行のもと参加者が「若者の生きづらさ」について考え、自分たちが明日から「どうアクションするか」を言葉にするまでをワークショップ形式で行いました。

1. 導入

安心した空間で、参加者が話しやすいようにこの場でのルールを設定しました。

2. ワーク①

(1) セルフワーク ～若者の生きづらさと思うものを3つ～

「若者＝高校生～20代」と設定し、各々が思う若者の生きづらさの原因を付箋に書きました。

(2) 全体ワーク ～プレインストーミング～

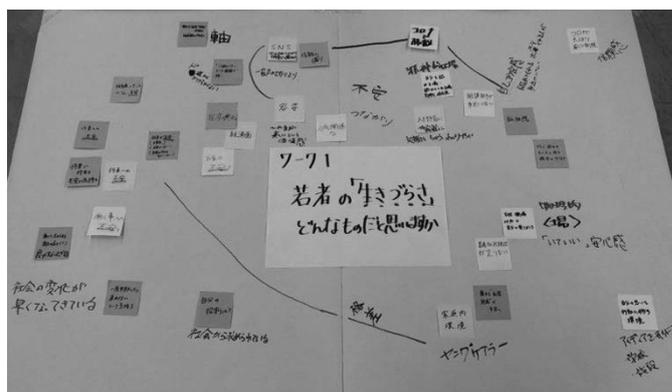
参加者の書いた付箋を元に、若者の生きづらさの原因を1枚の模造紙にまとめていきました。

3. 現場からの視点

これからのアクションを考えるにあたり、環境理解を後押しするようなトピックを、現場に立って感じていることや見えるものを中心にゲストに話していただきました。（一部抜粋）

・ネットを介して会話をする若者も増えている。ネットが居場所であること、SNSによって自分を「発信できる」ことは良い反面、「相互の」コミュニケーションを取れないという欠点もある。

- ・親も大変で、その皺寄せが子どもにきている。問題の低年齢化も起きている。
- ・現場で活動として行っているのは、若者を地域につなげて色々な人に出会い、お互い（若者→社会、地域→若者）の思い込み（先入観・ステレオタイプ）を解消できるよう「知る」機会を作ったり、自分がどんなことで求められるのか若者自身が感じられる機会を作ったりすること。
- ・コミュニケーションをとって、信頼関係を作ることが大事。挨拶を返してくれない若者もいるが、そこを起点に（それを受け入れ）いかに信頼関係を築いていけるか。「相談しに行く」というのはハードルが高い。本人たちは自然と話している中で困りごとをぽっと出す。生きづらさを解消するひとつに、自然と話せる関係の人と繋がれるかどうかがある。



・支援をしようとする人は「なんとかしよう」と思うけれど、関わる分野が多岐に渡るため、「別のところを頼る」もとても大事な視点。

・その若者にとって、社会に繋がるために、何が大事かという視点が一番大切。2019年のあるアンケート結果では昔に比べ、「相談できる場所は増加」しているけれど、「適切に相談を受けてもらった」という回答が低くなっている。居場所が多ければ多いほど相談できるという調査結果もあり、居場所の数を増やす必要がある。



4. ワーク② → 全体発表

(1) グループワーク 若者にとって生きやすい社会って？

3名程のグループで今までのワークを受け、どう思うかを話し合いました。

(2) セルフワーク ①若者が生きやすくなるためには？ ②そのために自分ができること！

①若者が生きやすくなるためには？	②そのために自分ができること！
<ul style="list-style-type: none"> ・色んな人やコミュニティなど接点がたくさんある。 ・たくさんの居場所をもつことが当たり前。 ・大人の問題を一つずつ解決する。 ・その人にとっての居場所がたくさんあること。 ・余白の時間があっても良いという考え方 ・楽しい逃げ道を用意する ・安心/信頼できる場を複数もてるようにする ・自分の軸の価値観で自分の好きになれる自分を目指せる環境 ・その人にとっての居場所×接点 ・価値観を周囲が認める ・選択できること、頼れるつながりが多くあること ・安心して過ごせる居場所がある社会にする ・多世代交流 ・実体験を大切にチャレンジする背中を押す 	<ul style="list-style-type: none"> ・ありのままの自分を受け入れてくれると思える雰囲気を作るよう意識する。自分自身が柔軟に捉える。 ・居場所の活動に関わる。会社に働きかける。 ・居場所を作りたい/活動したいと思っている人がアクションに移せるような支援/継続支援。窓口や支援団体の広報周知。 ・小さい依存先を作る。 ・自分が色んな人に相談してみる。 ・自分の価値観に縛られすぎない。「色々でいい」から「色々だからいい」へ。情報発信に努める。 ・信じる力、受け入れる力、価値観の形成。 ・「居場所」があることを発信していく。 ・生きづらさを知る。その人を知る。居場所を見つけ続ける、アンテナを張り巡らせる。 ・まずは自分の周りから少しずつ。

5. 成果・課題

「生きづらい」と思うことの原因を一言で述べるのは難しいです。原因が複合的で複雑化している中で、参加者が各々のアクションを決めることをゴールに分科会を進めました。ワークと現場の声を聞くことを通し、参加者は課題を知り・考え・意識するだけで、自分に出来る一歩が見つかっていきました。今回の分科会は、各々のアクションを実践することを通して、少しずつでも社会は変えていけることを改めて意識出来る機会となりました。

参加者の声（アンケート結果などから）

- ・大学生～50代の方と幅広い年代層の方と一緒に考えてことができ、自分も当事者として参加できて良かったです。
- ・その人にとっての居場所があることが大切なんだと知りました。たくさん友達やコミュニティなど依存先をもって、少しずつ依存することが自立につながるという新しい視点を得られました。
- ・若者の生の声を聞いたことが本当に大きかったです。

企画・運営

押山 愛紀子（公益財団法人東京 YMCA）【主担当・報告書】

神元 幸津江（NPO 法人全国災害ボランティア支援団体ネットワーク）【副担当】

高山 功平（株式会社ネオキャリア）【副担当】

No.2 1 クロージング 「考える 動いて笑顔 わたしから」

開催目的

参加者と実行委員が分科会に参加して考えたこと、感じたことを持ち寄り、互いの考えに触れながら、誰もが笑顔で過ごせる市民社会に大切なこと、そして私たちがどう動くべきか意見交換を行いました。そして、各々の思いを川柳にのせて分かち合い、明日への一歩を踏み出すきっかけとしました。さらに、ボランティアフォーラム2023を代表する川柳を決定しました。

開催日時

2月12日(日) 16:00~17:30

参加者数

74名(参加者42名:うちオンライン15名 会場27名、ボランティア7名、スタッフ25名)

内容

1. 分科会報告

今回実施した19の分科会のうち4分科会について主担当より報告を行いました。また、分科会での気づきやこれから取り組むべき課題などを川柳にまとめて披露しました。

(1) 報告① 分科会6「生活の中に笑いを〜江戸時代の明るく笑って生きるにヒント〜」

報告者:高野 まゆみ(実行委員、一般社団法人江戸小唄つながりコーチング)

地域課題を問題点よりも、望む未来に目を向けた所から考えたいと思い、笑いを取り上げました。前半の講演では江戸時代の教育力と川柳など言葉の紹介がありました。複数の参加者から、手書きの手紙や言葉の楽しさと大切さに気付いたとの声があがりました。言葉や文字でつながりを深める未来は楽しく可能性は∞という事で「東ボラの 未来予祝の 雪見酒」としました。

報告② 分科会13「社会の現状から働く場のダイバーシティを考えよう!〜ガチャガチャ de ダイバーシティ体験会〜」

報告者:高山 功平(実行委員、株式会社ネオキャリア)

前半のアイスブレイクでは、最初距離があった参加者同士が近づくことができた。その様子を句に込めて「スマイルで 心近づく 数マイル」としました。そして結論として、多様性を担保するだけでは何も解決しない、対話をするのが大切、という気づきを得たことを句に込めて「多様性 対話の場づくり 早うせい」としました。

(2) 報告③ 分科会12「ボランティアの中心・飯田橋でモヤモヤを叫ぶ〜施設の中はどうなってますか?ボランティアさんどうしてますか?〜」

報告者:上岡 夏海(実行委員、白十字ホーム)

老人ホームなどコロナ禍で閉塞的になっていた施設が、次のステップに進むためにどうすればよいのだろう、そんなモヤモヤを抱えた人たちの想いを共有する分科会を実施しました。大海はあるのを知っているけれど井の中の蛙だった、海に出てみただけで新たなモヤモヤに触れた、ということ句に込めて「モヤモヤの 大海原を 泳いでく!」としました。

(3) 報告④ 分科会4「みんなで考える多文化共生〜多文化は日本に何をもたらすのか〜」

報告者:村尾 憲治(実行委員、多文化共生プロジェクト)

多様性と共生をつなげていこうという趣旨で分科会を実施し、外国にルーツのある若者2名が登壇しました。日本で生活することを決めた若者たちのライフストーリーを聞いて、その力強さにみんなで驚きました。このことを句に込めて「外国人 気づいてみれば 日本人」としました。

2. 感想シェアと川柳の記入

参加者と実行委員ミックスで1グループ5人程度に分かれて、実行委員のグループ進行のもと、それぞれが参加した分科会の感想やそこで考えたこと、これから取り組みたいと思ったことなどシェアしました。またそれぞれの想いやこれからの行動を川柳にまとめ披露しました。

3. 代表句の披露

各グループで選出した代表句を全体で披露しました(A~Hは対面、①~④はオンライン)。

- グループA「多様性 話して見える 広い世界」
- グループB「ボランティア する人いつか される人」
- グループC「ボランティア 笑顔広がる 楽しいな」
- グループD「コロナ禍の イレギュラーを きっかに」
- グループE「各々が 素敵な心を 持っている」
- グループF「東ボラの 未来予祝の 雪見酒」
- グループG「多様性 対話の場づくり 早うせい」
- グループH「区境の 笑顔が溢れ 満点か」
- グループ①「貧困が なくなる社会 目指したく」
- グループ②「貧困が ここまで未来を 奪うのか」
- グループ③「い〜ばしょ わらってないて げんきそ」
- グループ④「入り口は どこにでもある ボランティア」



4. ボランティアフォーラム川柳の決定

投票を行い、金賞、銀賞、銅賞を決定し、それぞれの作者に句に込めた思いを紹介いただきました。

- (1) 金賞「入り口は どこにでもある ボランティア」
分科会に参加して、ボランティアするひとの想いを活動につないでいく中間支援の果たす役割をひしひしと感じました。そしてボランティアのきっかけはどこにでもあることを句に込めました。
- (2) 銀賞「コロナ禍の イレギュラーを きっかけに」
コロナ禍の大学生のボランティア活動をテーマとした分科会に登壇しました。コロナによってできなくなったこともたくさんあるけれど、コロナ禍だからこそできたこともあって、そのことを句に込めました。
- (3) 銅賞「ボランティア 笑顔広がる 楽しいな」
フォーラムに参加している皆さんが楽しんでボランティア活動に参加している様子をうかがうことができました。その笑顔が広がる様子を句に込めました。

5. まとめ

東京ボランティア・市民活動センター 山崎美貴子所長より川柳「喜びの 溢れて嬉しい ボランティア」の披露と合わせて、クロージングのタイトルに基づき、自分の体を使って、考える、体験することの大切さについて道元の「他は是我にあらず」の言葉を紐解きながらお話いただきました。

もっと当日の熱気を味わおう！ボランティアフォーラム川柳一覧
(主に会場参加のもの)はこちら→
<https://www.tvac.or.jp/download/file/ExHu8cVLFMYm.pdf>



成果・課題

- ・川柳を通じて楽しみながらフォーラムを振り返り、大切にしたいことや、これから取り組むことを言語化し、人前で披露することで、ひとりひとりの明日からの一歩を後押しすることができました。
- ・書かれた川柳ひとつひとつ非常に味わい深く、全参加者に披露いただく時間をとれなかったのが心残りです。
- ・フォーラム終了後、東京ボランティア・市民活動センターに川柳を掲示することで、フォーラムを知らない人にも魅力を伝える機会を創出することができました。

企画・運営

芦澤 弘子（聖学院大学ボランティア活動支援センター）【報告書】
足立 陽子（公益財団法人東京都人権啓発センター）、枝見 太郎（一般財団法人富士福祉事業団）
高山 功平（株式会社ネオキャリア）、宮田 るり子（やさしい日本語ファシリテーター）
高山 和久（東京ボランティア・市民活動センター）

No.22 ふれあい満点市場 ～NPO・NGOの作品展示販売～

開催目的

通販やインターネットでいろいろな物が買えるようになった時代。みなさんは、自分が普通にげなく使っている物を作っている方を知っていますか。区境ホールで開催したふれあい満点市場では、ボランティアグループや福祉作業所の方が、手作りの作品を展示販売しました。作品には、作り手の想いがこめられています。お買い物をしながら、作品ができるまでのことや、作品を作っている方のことをぜひ聞いてみていただければと思います。

開催日時

2月11日(土) 11:00～15:00

2月12日(日) 11:00～15:00

出展団体

オレンジライン／支えあう21世紀の会／ジャカルタ・ジャパン・ネットワーク／地球の友と歩む会／東京カリタスの家／東京都青年団体連合／東京ボランティア・市民活動センター

内容・成果・課題

飯田橋セントラルプラザ1階区境ホールにて開催しました。土曜日は人通りも多く、商品を手にとる方も多くいました。日曜日は、のんびりとした時間の中、会場にいらした方に作品の説明をしたりしながら開催しました。



←支えあう21世紀の会のみなさん



当日の様子



東京都青年団体連合のみなさん



ジャカルタ・ジャパン・ネットワークのみなさん

企画・運営

渡部 芽生(東京ボランティア・市民活動センター)【主担当・報告書】

山本 りさ(東京ボランティア・市民活動センター)

No.23 情報誌『ネットワーク』表紙原画展

開催目的

市民活動情報誌『ネットワーク』の表紙原画展は、イラストレーターのフローラル信子さんによる作品です。〃特別企画〃として多くの方に見ていただけるよう、フリースペースにて、ひと月近く展示しました。表紙原画展は、ボランティアフォーラムでの恒例企画となっていますが、バリエーションに富んだイラストを、毎年、楽しみにして下さる方々がいいます。

開催日時

2月4日(金)～3月1日(水)

参加者数

ボランティアフォーラム実行委員、ボランティアスタッフ
東京ボランティア・市民活動センター来所者の皆さん



出演者

フローラル信子さん(イラストレーター)



企画・運営

秋池 智子(東京ボランティア・市民活動センター)【主担当・報告者】
朝比奈 ゆり(東京ボランティア・市民活動センター)

市民社会をつくるボランティアフォーラム TOKYO 開催状況

回	開催年	全体テーマ	カテゴリー
1	2004	「つなぐ つながる つなぎあう」	なし
2	2005	「つなぐ。つながる。つなぎあう。」	一日コミュニティスクール、災害から生をみつめる、IT がつなぐ、街を発見する足たち、アートがまちに作用する、ホームレス問題と私たちの暮らしを考える、私にとってのボランティア、介護をかんがえる、社会の仕組みを考える、虐待を防ぐ
3	2006	「つなぐ、つながる、つなぎあう。」	体験ボランティア入門編、ブラッシュアップ NPO/NGO、社会の課題最前線！、アート、社会のしくみ
4	2007	「気づく、動く、変える、市民の力。」	格差社会、制度・仕組みの欠陥・ひずみ、社会の課題最前線、ボランティアリズム
5	2008	「危機（クライシス）に立ち向かう市民活動」	福祉制度の崩壊から創造へ、環境破壊と創造、ボランティアリズム復活への道、暮らしをみつめて
6	2009	「今、市民として“生きる価値”を問う」	社会の仕組みと制度、安心して暮らせる地域社会づくり、「市民社会」の担い手づくり、お金で買えない価値
7	2010	「希望は市民（わたしたち）が創る」	つながる、発信する、考える、育てる
8	2011	「市民（わたしたち）が創る公共～紡ぎあう地域の絆～」	社会に必要な仕組み、地域とのつながり、育ちあう市民、ボランティアリズム
9	2013	「試される市民力（わたしたちのちから）」	つながり、生活・暮らし、若者の市民力、ボランティアリズム
10	2014	「気づく・築く 市民力（わたしたちのちから）」	生活・暮らし、地域・居場所、若者の市民力、ボランティアリズム
11	2015	「今を想い、未来をつくる」	グローバルとローカル、暮らしと居場所、ボランティアリズムと組織運営、いまと未来
12	2016	「私たちがつくる あしたのピース」	なし
13	2017	「暮らしの中から動き出す、創り出す。」	地域、居場所、子ども・若者、市民活動・NPO、ボランティア、社会・制度、当事者・多様性、フィールドワーク
14	2018	「つながりをずっと出会いをもっと」	社会・しくみ、コミュニティ、参加のかたち、生き方・はたらき方
15	2019	「イロドリある未来へ～わたしから踏み出す一歩～」	参加・人の力、ダイバーシティ、カタチ、時代・未来
16	2020	「今こそ動こう！イロドリある未来へ～」	今見えていること（社会課題）、未来の課題・未来に向けて今すべきこと、ボランティアな動き
17	2021	「つながるチカラ 新しいカタチ」	地域・居場所など、障害理解・当事者など、ボランティア、新しい取り組みなど
18	2022	「みんなで考える。だから、オモシロイ。」	アフターコロナ・サステナブル、凸凹ライフステージ、居場所、サステナブルボランティアリズム
19	2023	「Think Act Smile◎」	孤立・孤独、地域、多文化、平和・人権

*2012年は「第20回全国ボランティアフェスティバル TOKYO」開催のため未実施

市民社会をつくるボランティアフォーラムT O K Y O 2023 実行委員名簿

	氏名	所属団体	実行委員経験回数
1	芦澤 弘子	聖学院大学ボランティア活動支援センター	6
2	足立 陽子	公益財団法人東京都人権啓発センター（公募）	6
3	阿南 有紀	社会福祉法人渋谷区社会福祉協議会 しびやボランティアセンター	初めて
4	市川 徹	(株)世田谷社／一般財団法人世田谷コミュニティ財団	7
5	稲葉 圭亮	社会福祉法人国分寺市社会福祉協議会 ボランティア活動センターこくぶんじ	初めて
6	犬塚 尚樹	NPO法人ふれあいの家 おばちゃんち	3
7	上田 英司	日本NPOセンター	11
8	枝見 太郎	一般財団法人富士福祉事業団	18
9	押山 愛紀子	公益財団法人東京YMCA liby	初めて
10	鹿住 貴之	認定NPO法人JUON NETWORK	18
11	上岡 夏海	白十字ホーム	2
12	神元 幸津江	特定非営利活動法人全国災害ボランティア支援団体ネットワーク(JVOAD)	9
13	正田 理沙子	NPO法人グッド!	初めて
14	高野 まゆみ	一般社団法人江戸小唄つながりコーチング（公募）	初めて
15	高橋 義博	府中市市民活動センター ブラッツ/Tripod	8
16	高山 功平	株式会社ネオキャリア	初めて
17	水田 征吾	ちょうふチャリティーウォーク	4
18	宮田 るり子	やさしい日本語ファシリテーター（公募）	初めて
19	村尾 憲治	多文化共生プロジェクト（公募）	初めて

（50音順・敬称略）

●事務局

	高山 和久	東京ボランティア・市民活動センター	
	熊谷 紀良	東京ボランティア・市民活動センター	
	榎本 朝美	東京ボランティア・市民活動センター	
	渡部 芽生	東京ボランティア・市民活動センター	
	太田 学	東京ボランティア・市民活動センター	

■協賛・協力

< 特別協賛 >

株式会社三菱UFJ銀行

< 協賛 >

NEC ネットエスアイ株式会社

NPO 法人モバイル・コミュニケーション・ファンド

株式会社熊谷組

公益財団法人 SOMPO 環境財団

公益財団法人 SOMPO 福祉財団

公益財団法人日本社会福祉弘済会

公益財団法人日本テレビ小鳩文化事業団

社会福祉法人テレビ朝日福祉文化事業団

西武信用金庫飯田橋支店

東京都生活協同組合連合会

トヨタ自動車株式会社

< 協力 >

株式会社ガイア

社会福祉法人清水基金

生活協同組合パルシステム東京

中央労働金庫

モンデリーズ・ジャパン株式会社

(50音順・敬称略)

❀ボランティアでご協力いただいたみなさま❀

ボランタリーフォーラム実施にあたっては、
13名のボランティアの方にご協力いただきました。
本報告書では、お名前の記載は控えましたが、当日会場で開催した
参加者の案内などを中心に、支えていただきました。

ボランティアのみなさまのおかげで、
無事に全日程を終了することができました。
心から感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

また、コロナ禍での開催ということで、
ボランティアの参加を見送った方もいらっしゃるのではないかと思います。
また次回、ボランタリーフォーラムでお待ちしております。

ボランティアフォーラムにご協力いただいたみなさま

フォーラムを開催するにあたり、多くの方にご協力いただきました。
寄付や物品提供等、ご協力をいただいた企業・団体のみなさま、
当日の運営にご協力いただいたボランティアのみなさま、
企画・運営に携わった実行委員のみなさま、
多くの方に支えられ、無事開催することができました。
多大なるご支援・ご協力をいただきましたこと、
心より御礼申し上げます。
誰もが参加できる市民社会を目指し、
活動を続けていきたいと思えます。
引き続き、ご支援、ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

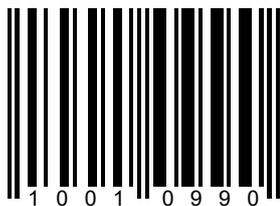


3日間終了後に参加者・ボランティア・実行委員・事務局・TVACスタッフによる記念撮影

市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO2023 報 告 書

〈発 行〉 市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO 2023 実行委員会
事務局 東京ボランティア・市民活動センター
〒162-0823 東京都新宿区神楽河岸 1-1
TEL 03-3235-1171 / FAX 03-3235-0050
<http://www.tvac.or.jp>

〈発行年月〉 2023 年 3 月



(センター管理用)

